
リリカルなのは 戦鬼の男

ジャン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカルなのは 戦鬼の男

【Nコード】

N3596U

【作者名】

ジャン

【あらすじ】

私、高町ヴィヴィオは

クラナガンに住む小学4年生

ヒビキさんという鬼に変わって人助けする人に出逢って

何かが変わり始めました！！

巻之巻 響く鬼（前書き）

私・高町ヴィヴィオはクラナガンに住む小学三年生。

本日法事のためママの出身世界までパパと一緒に行く事になりました。

そこで私は・・・あの人と再会したのでした

鬼・ヒビキ

夢・高町ヴィヴィオ

長・日高仁志

優・高町なのは

和・持田ひとみ

吉之巻 響く鬼

吉之巻 響く鬼

JS事件終結から数カ月後

法事の為に高町ヴィヴィオは次元運航艇にてなのはの住む世界に向かっているところだった。

「久しぶりだな〜海鳴のみんな元気かな〜」

「そういえば・・・ノーヴェもなのはの世界に行ってるんだよね？」

「うん。今日から年に一度の赤心寺での合宿だからね」

「ストライクアーツだけじゃなくて赤心少林拳まで始めるなんて」

そんな雑談をしているのはとユーノ。

そして

「う〜・・・酔った・・・」

「じゃあヴィヴィオ外の空気吸ってくれば？」

「そうする・・・」

なのはの言葉に重い足取りで外甲板に向かうヴィヴィオ。

「すう〜はあ〜」

思いっきり深呼吸すると

奇妙な歌が

「イ〜ル〜カが居るぞ〜た〜く〜さ〜ん居るぞ〜」

ヴィヴィオがその歌に振り返ると・・・

あの青年の姿が・・・

ヴィヴィオより上の階に居るヒビキ。

「?」

ヴィヴィオの視線に振り返るヒビキはヴィヴィオに気づき手を振って挨拶をした。

「!」

ヴィヴィオがヒビキの元へ行こうとしたその時。

「〜」

次元運航艇の甲板にいた少年が外の虚無空間に落ちそうになっていた。

「危ないよ!」

ヴィヴィオが少年に駆け寄りうつとするが少年が運航艇の甲板から落ちってしまった。

「!!!」

青ざめるヴィヴィオ。虚無空間に落ちれば命はない

その時

「!!!」

上の階に居たヒビキが飛び降りた。

「え!!!」

ヴィヴィオが甲板の下を見ると・・・

「!!!」

少年を抱え外壁に張り付いているヒビキの姿が・・・

「ええ!?!」

仰天するヴィヴィオにヒビキは・・・

「あたたたた!!!」

少年に耳を引っ張られるヒビキ。

「よしっ!はああ!!!」

少年を抱えながらそのまま腕力でデッキまでジャンプするビビキ。

「楽しかったね！」

「ははは・・・へっくしょん!!」

少年に懐かれくしゃみするビビキを追ってきたヴィヴィオ。少年は親が迎えに来て何事もなかったかのように保護された。

「結構鍛えてます」

「へ？」

始めて逢った時の言葉を残しながらヴィヴィオの前を通り過ぎるビビキ。

「着いた・・・」

次元運航艇で海鳴に到着したヴィヴィオ、なのは、ユーノ。空間を空港に繋げている為空港に出たヴィヴィオ達。

「それじゃ・・・タクシー拾おうか」

ユーノがタクシーを拾うべくターミナルに向かうとヴィヴィオもターミナルに向かった。

そこに

「あー日菜佳さん。今海鳴につきました」

ターミナルで電話するヒビキ。

『あー明日夢君！今ついたんすかー！？』

「いやヒビキですって」

笑いながら電話の先の人物に話しかけるヒビキ。

『んーあきら君・・・じゃなくてイブキ殿ももう少しでこっちに戻ってくるって言ってましたねー』

「はあ。それじゃあイブキさんが帰る前には帰ります」

『それじゃあお土産ヨロシク頼みますよー明日夢君』

「だからヒビキですって。イブキさんや伊織さん達によろしくお願
いします・・・あのーおやっさんは？」

『ああー日高殿でしたら今日も会議ですってー』

「そうですね・・・それじゃおやっさんにもよろしくお願ひします」

そう言って電話を切るヒビキ。そのヒビキと目が合っヴィヴィオ。

「」

ヴィヴィオに気づき手を振るヒビキに照れてしまい顔を背けてしま
うヴィヴィオ。

「あれ？ヴィヴィオあの人知り合い？」

「え・・・あ・・・う・・・あ」

なのはに聞かれてしまい照れてしまつヴィヴィオはいそいそとタク
シーに乗り込んだ。

その後

「南無南無南無」

高町家で行われる法事。ヴィヴィオにとってはじめての法事である
為退屈な事この上なかった。

精進落としての席でも退屈そうにしているヴィヴィオ。大人の行事は
正直退屈なようだったそんなヴィヴィオを見かねた美由希が・・・

「退屈？」

「はい・・・」

「それじゃ〜出かけようか」

「うん！」

そう言つて美由希の車に乗り近くの山のハイキングコースに入るヴィオと美由希。

一方

静かな森の中でヒビキの姿があった。

「・・・久しぶり」

一本の大木に手をかけるヒビキ。

「う〜ん空気が美味しい〜」

美由希に連れられハイキングコースの森で深呼吸するヴィオ。

「ここはね私が良く修行に来る山なんだ〜」

「美由希さんって確か剣術の？」

「そうだよ。ヴィヴィオもやってみる？」

「はぁ……どうしようかな？」

ノーヴェからストライクアーツを学んでいるが中々上手くいかず悩んでいるヴィヴィオ。

「なんか……悩み事かな？」

「え？」

「顔に書いてあるよ」

美由希に図星を付かれてしまうヴィヴィオ。その時背後から気配を感じた。

「誰？」

「や」

「……ヒビキさん」

木の枝を担いで現れたヒビキ。そしてそれを気にヴィヴィオ達は山を降りる事になった。

「あの……ヒビキさんって……上の名前ですか？下の名前ですか？」

「ヒビキです」

「あの・・・あの子は大丈夫ですか？」

「大丈夫です」

一見すると取っ付きにくいような会話が續くが何故か楽しそうなヴィヴィオ。その表情を見ていた美由希は安心した表情でヴィヴィオを見るが・・・

「!!!」

突如背後から蜘蛛の糸が美由希を締め上げ連れ去った。

「う!!!」

「美由希さん!!!」

「!!!」

連れ去られた美由希を追いかけるヴィヴィオとヒビキ。

「え!」

今度はヴィヴィオに蜘蛛の糸が放たれるが咄嗟にヒビキがリュックサックを投げつけ蜘蛛の糸の弾道を逸らした。ヴィヴィオはあまりの事に腰が抜けてしまった。

「大丈夫?」

「はい！」

ヒビキに手をかりヴィヴィオは立ち上がると美由希を捜し続けた。

「どこに！？」

「あそこだ！」

ヒビキが指差した方向に蜘蛛の糸に絡まっている美由希。そこには奇妙な装束を纏った女と男が居た。

「誘拐？」

「！！！」

咄嗟にアカネタカを起動させ男と女に投げつけた。

『クエエエ！！』

男と女はアカネタカに攻撃され森の奥に逃げこんだ。

ヒビキは倒れている美由希に駆け寄り息を確かめた。

「よし！少女さん！ここ任せた！何かあったら大声出して！」

「ちょっと！ヒビキさん！！！」

倒れている美由希をヴィヴィオに任せヒビキは男と女を追った。

森の奥でヒビキを待ち構えていた男と女。

そして不気味に手を叩き唱え始めた。

「お〜に〜さんこちら〜へ〜のなるほつ〜・・・お〜にさん
ちら・・・へ〜のなる・・・」

「・・・・」

リュックサックを下ろすヒビキは腰から音叉を取り出した。

そして

・・・キーン・・・

指で音叉を弾くと静かな響きが起こり音叉を額に構えると彫刻された鬼の紋章がヒビキの額に浮かび上がった。

「美由希さん！大丈夫！美由希・・・」ハアアア！！！！」

美由希を心配するヴィヴィオだが何かの叫び声を聞いた。

「あの叫び・・・まさか・・・」

ヴィヴィオの頭に浮かんだのはゆりかごで自分を助けてくれた鬼の姿だった。

「・・・・・・・・」

森の奥で男と女に対峙する鬼。

「！！！！」

鬼の姿を見た男・童子と女・姫の姿が異型の怪物になった。

「プシューー!!」

童子と姫が口から蜘蛛の糸を吐きながら移動を開始すると鬼も木々を跳躍し童子と姫を追いかけた。

「!!」

鈴の音と共に凄まじいスピードで跳躍する鬼。木の枝に立った童子が鬼に蜘蛛の糸を吐きかけるが鬼は腕から爪を出し切り裂いた。

「!!」

背後から姫の蹴りが入る鬼。一瞬よろけ木から落ちてしまおうが咄嗟に枝にしがみ付き大車輪しながら姫に向かって蹴りを入れた。

一方

「うわあああああああああ!!」

美由希に絡みついた蜘蛛の糸を気持ち悪がりながら取り外すヴィヴィオ。

「よつとー!!」

姫を蹴り飛ばす鬼。形勢不利と睨んだ姫は一時撤退をした。

「うー!!」

だが背後から蜘蛛の爪で背中を斬られてしまう鬼。しかしカウンタ―で爪を捻じ込む鬼に吹き飛ばされてしまう童子。

「え?」

近くで物凄い音がした為ヴィヴィオは様子を見に音のした方に向かうと凄まじい光景が繰り広げられていた。

鬼と妖怪が戦っている姿だった。

「あの鬼・・・」

ヴィヴィオが見た鬼。それはかつて自分を助けてくれた鬼だった。

鬼の口が開くと口から紫の炎が童子に向かって放たれた。

「ギシャアアアアアアアア!」

火達磨になり灰になる童子。

「あ・・・ああ」

声にならない声を上げるヴィヴィオ。

そして

「ん？」

鬼がヴィヴィオに振り返った。

壱之巻 響く鬼（後書き）

ヴィヴィオ

「ヒビキさんって普段何やってるんですか？」

ヒビキ

「人助けかな？」

姫

「あなたの父君は鬼さんにやられたようですね」

ヒビキ

「自分を信じる事・・・それが自分自身への第一歩なんじゃないかな？」

ヴィヴィオ

「ヒビキさん！！」

壱の巻 吼える蜘蛛

式之巻 吼える蜘蛛（前書き）

私！高町ヴィヴィオは

クラナガンに住む小学3年生

海鳴に向かう船の中でヒビキさんというちょっと変わった人に出逢って

何かが変わり始めました。

海鳴に着た私はとんでもない物を目撃してしまいました。

今私の目の前には・・・鬼が居ます！！

鬼・ヒビキ

夢・高町ヴィヴィオ

長・日高仁志

優・高町なのは

和・持田ひとみ

弐之巻 吼える蜘蛛

弐之巻 吼える蜘蛛

「ん？」

ヴィヴィオに振り返る鬼。その鬼を見たヴィヴィオは……

「うわあああああ！！！」

駆け出してしまった。

それを見た鬼は……

「あたたた……」

同時にやられた背中の中の傷が痛み……

「ふっ」と

背中の中の傷を塞いだ。

「はあ・・・はあ・・・」

必死に逃げのび美由希の元へ駆けつけるヴィヴィオ。

「ん!!んん!!」

乱暴に美由希を連れ出そうとするヴィヴィオだが・・・

「ちよつと待った」

「!?!」

ヴィヴィオが振り返った先に居たヒビキ。何故か先ほどと格好が違う。

「それじゃあ・・・降りようか」

「え?は!はい!」

美由希をおぶるヒビキと一緒に山を降りるヴィヴィオ。ヒビキが居るとヴィヴィオの心は何故か安心した。

「そつえばここにはどつちやって?」

「美由希さんの車」

「・・・」

黙るヒビキ。

「うわ〜ヒビキさん前！前！」

「うわあ！！！」

幸いオートマ車のためエンジンは心配ないがここしばらくペーパー
ドライバーだった為四苦八苦しながら帰るヒビキ達。

「…………着いた…………」

「…………怖かった…………」

ヒビキの運転に肝が冷えたヴィヴィオ。

「それじゃ…………降りようか」「ヒビキさん！」「ん？」

「ちよつと…………相談が」

車の中でヴィヴィオの相談を聞くヒビキ。

そして

「どうした！？」

「あ！大丈夫です」

美由希を担ぎ込んできたヒビキとヴィヴィオに土郎が慌てて迎え入

れた。

「気を失ってるだけだね」

「・・・よかったそれじゃ」

「待ちなさい」

「？」

士郎に呼び止められるヒビキ。

「娘が世話になったね。良かったら夕飯でもどうだい？」

「え？あ！その・・・」

「いいからヴィヴィオもそのほうが良いだろう？」

「うん！」

そう言っつて士郎たちに押されてしまいご相伴に預かった。

そして

甘味処たちばな クラナガン店

「え？そんな所に魔化魍が」

ヒビキからの次元電話を取るひとみ。

『ああ。狙われたのは女性と子供なので・・・ツチグモだともう』

「ツチグモが？」

『うん・・・だからそっちに戻るのもう少しかかると思っ』

「撥は？」

『ちゃんと霊樹から調達したから・・・それじゃ』

そう言っつて電話を切るヒビキ。

こうして高町家の食卓に預かれるヒビキ。

「私たちクラナガンに住んでまして」

「あ！偶然ですね僕もクラナガンに住んでいます」

「え！偶然！ご近所さんですね！ヴィヴィオも今聖王教会の小学校に通ってるんですよ！」

「てことは・・・Stヒルデ魔法学院ですね」

「え？」

「地元の事なんで・・・」

何故か高町家と打ち解けているヒビキ。

夕飯が終わりヴィヴィオがヒビキに相談しようと客間に入ると・・・

「あー！」

書置きが置いてあった。

用事ができたので帰りまゝす ヒビキ

翌日

「うーん・・・」

朝の散歩に出たヴィヴィオ。まだ日は昇りきっておらず眩しかった。

海沿いの道まで足を伸ばすとそこには

「　」

ヒビキの姿が・・・

ヒビキは木を削って太鼓の撥のような物を作っていた自然とヒビキの傍らに立つヴィヴィオ。

「ヒビキさん・・・」

「ん？少女さん？」

ヴィヴィオに気づくヒビキ。

「ヒビキさんって普段何やってるんですか？」

「人助け・・・かな？」

ヴィヴィオはヒビキに対して相談を持ちかけるのだった。

「・・・ヒビキさんは・・・昨日私が車で言ったこと・・・どう思いました？」

「うん・・・」

ヴィヴィオの相談とはヒルデ魔法学院に通う事になったがこれからも人間関係が上手くいくかどうか不安だった。

「うん・・・なんか難しいね・・・」

ヒビキも頭を捻るが結論を出した。

「自分を信じる事・・・それが自分への第一歩なんじゃないかな？」

「それ！」

「よしできた！」

ヴィヴィオがヒビキの言葉に食いつこうとするとヒビキは太鼓の撥

を作り上げ立ち上がった。

「それじゃあね・・・出会いがあれば、別れもあるさ。」

そう言ってヴィヴィオの前から去っていくヒビキ。

その背中を見送る事しかできないヴィヴィオ。

そして

『クエエエエエエ』

『バウバウ!!』

『ウホウホ!!』

先日の森を三匹のディスクアニマルが散策していた。

それを見ていた姫は

「あなたの父君は鬼さんにやられたみたいね」

小屋に向かつてそう呟いた。そうすると小屋が開き中から二つの赤い目が輝いていた。

「すう」

ヒビキと別れた後ヴィヴィオはヒビキと再会した森に来ていた。ここでなら吹っ切る事が出来るそう思っていたからだ。

「よし!」

奮起し森を出ようと道に出るが何かの物音に気づいた。

「ん?」

ヴィヴィオが音の方に行くと掘っ立て小屋があった。

「ここから……!」

背後に何かを感じるヴィヴィオ。振り返ると姫の姿が……

「あ……ああ!」

恐怖で腰を抜かすヴィヴィオを摘み上げる姫は小屋に放り込もうとしたその時だった。

「!!!」

姫に向かってリュックサックが投げつけられた。リュックサックの一撃で姫はヴィヴィオを話すとアカネタカ、ルリオオカミが姫に纏わりつきヴィヴィオから離れた。

「少女さん!」

「ヒビキさん!」

ヴィヴィオを保護するヒビキ。

「どうしてここに!?」

「訳は後!」

ヴィヴィオを保護しようとする姫は妖怪の姿を現しヒビキ達の前に立ちはだかった。

「!!!」

「うわ!!!」

ヴィヴィオを投げ飛ばし距離を置くヒビキ。

「痛っ」

ヴィヴィオが起き上がるとヒビキが腰から音叉を取り出した。

そして

ヴィヴィオの目の前で変身音叉・音角を構えるヒビキは指で弾いた。

・・・キーン・・・

静かな響きが鳴った。

「・・・この音・・・」

ヴィヴィオは今日撃する

この音の正体を

「!」

ヒビキが音角を額に掲げると鬼の紋章が額に浮かび上がり

「!」

身体から紫の炎が燃え上がった。

「・・・嘘!!」

目の前の発火現象に驚くヴィヴィオ。

そして

「あああああああああああ………」

凄まじい呻きと……

「はあ!」

……猛る叫びと共に炎を吹き飛ばした先に居たのは……

……響……

……鬼……

……響鬼……

……鬼……

……音撃……

「!」

腰に音角を納める響鬼はゆっくりヴィヴィオに振り向いた。

「走って」

「え？」

「じゃあああああ！！」

遅いかかって来る姫を蹴り飛ばす響鬼。すると姫は小屋の中から現れた蜘蛛の糸が姫を捕らえ食らった。

「……！！！」

響鬼が後ずさるように走るとヴィヴィオも走り始めた。

「！！！」

小屋から六本の足が現れると響鬼を追いかけて始めた。

「少女さん！走って！！！」

「はあ！はあ！！！」

響鬼に言われたとおり走り始めるヴィヴィオ。

森の木々をなぎ倒しヒビキを追いかける小屋。

『グシャアアアアア！！』

小屋の扉が開き中からツチグモが姿を現した。

「よつとー!!」

ツチグモを蹴り飛ばしながら進む方向を変えるヒビキ。そして広い場所に出た。

「はぁ・・・はぁ・・・え？」

森を走り抜けたヴィヴィオも同じ場所に出てしまった。

『!?!?』

ツチグモがヴィヴィオに狙いを定めた。

「うわあああああー!!」

ヴィヴィオが叫んだその時

「はぁー!!」

響鬼がツチグモの背中に飛び乗り音撃鼓を捻じ込んだ。

ヨオオー!!

音撃鼓のスイッチを入れると巨大な太鼓が描き出された。その姿に聖王として暴走したかつての自分の姿を重ねるヴィヴィオ。

そして腰から二本の音撃棒を構える響鬼。

「はあ……はあ……」

ツチグモの背中に向かって振り下ろし静かな響きが巻き起こった。

そして

「はあ……」

ダンダンダンダン……

火

炎

連

打の型

火炎連打の型

ツチグモに音撃打・火炎連打の型が打ち込まれていく。

「は！は！は！はあ！！！！！」

荒れ狂うように次々と打ち込まれていく音にツチグモはつめきをあげていった。

「はあ・・・はあ！！」

ズダン！！！！

両手の音撃棒を振り下ろし最大の音を打ち込む響鬼。そしてツチグモは膨張し爆発を起こした。

「よつと」

音撃棒を回しながらヴィヴィオの前に降り立つ響鬼はヴィヴィオの前で顔の変身を解いた。

「！！！！」

「はあ・・・はあ・・・鍛えてるんです シュツ！！」

ヴィヴィオの前で笑顔になり答えるヒビキ。

「ハックション！！ぷは！」

「はは」

くしゃみをし鼻をかくヒビキを笑って見つめるヴィヴィオだった。

式之巻 吼える蜘蛛（後書き）

ヒビキ

「あれ？クラナガンのヤマビ」？」

ひとみ

「またばらしたの？」

仁志

「なんだ？鍛えてないな」

ひとみ

「みんながみんなヒビキ君みたいに強いわけじゃないんだからね」

参之巻 たちばな

参之卷 たちばな（前書き）

私！高町ヴィヴィオはクラナガンに住む小学三年生。

ある日法事で帰った海鳴で不思議な人に出逢いました！

その人の名は・・・ヒビキ

普段はちよつとトボけたヒビキさん。

そのヒビキさんは私の目の前で紫の炎に包まれ鬼に変身しました。

そうその鬼は前に私を助けてくれた鬼でした・・・

鬼・ヒビキ

夢・高町ヴィヴィオ

長・日高仁志

優・高町なのは

和・持田ひとみ

風・イブキ

参之卷 たちばな

参之卷 たちばな

法事が終わりクラナガンに帰ってきたヴィヴィオ達。

「……………」

「ん？」

何故かポーっとしているヴィヴィオになのはが少し心配になった。

「どうしたの？ヴィヴィオ？」

「え！あうん！なんでもないよ」

「そう？それにしても残念だったね。ヒビキさん帰っちゃって」

「ビク！！」

なのはの言ったヒビキという言葉に反応するヴィヴィオ。そうヴィオにとってヒビキの正体がとても重いのだった。

かつてJS事件と呼ばれた事件において我を忘れなのはを傷つけた自分を助けてくれた鬼。それがまさかヒビキだったとは夢にも思わなかったのだ。

(どうしよ〜お礼言っでないよ〜)

どうしても一言お礼が言いたいヴィヴィオはヒビキへの思いを募らせるだった。

「あ！そういえばヴィヴィオ面白い本見つけたよ」

「ん？」

ユーノが無限書庫で見つけた本をヴィヴィオに渡した。本のタイトルを読んでみるヴィヴィオ。

「ん？『聖王と七人の戦鬼』？これは？」

「なんかヴィヴィオがこの間鬼〜って言ってたから鬼の本探したんだ」

「ありがとう！今度読むね」

そう言って本をしまっヴィヴィオだった。

甘味処たちばな クラナガン店

ヒビキが二人の女性と一緒にテーブルで何かの資料を見ていた。

「あれ？クラナガンのヤマビコ？」

「そつみたい・・・どうもこの山に出たらしくて」

地図を指差すひとみ。

「ん〜まさかヤマビコが出るなんて」

「今のローテーションじゃヒビキ君しか行けないね」

何かの対策をしているヒビキとひとみ。

そして

「相手がヤマビコじゃ私が行っても陣中見舞いにしかなりませんね」

「じゃあイブキさんは留守番お願いします。シュッ！」

「はい」

イブキと呼ばれた女性にヒビキはスナップするとキャンプ用品一式を車に積み込んだ。

「！！！」

イブキに火打石の願掛けをしてもらいひとみが運転席に座るとヒビキが助手席に座り現場に向かうのだった。

現場の山に向かう道中会話が弾むヒビキとひとみ。

「それにしても最近魔化魍がクラナガンに出るようになったよね」

「そうだね。それで僕たちがこっちの世界に派遣されてるんだよね」

「鬼のなり手は少ないのに魔化魍は増える一方だし。ヒビキ君は弟子取らないの？」

「僕は・・・その」

弟子を取るということに抵抗を感じるヒビキ。

「あ！そういえばこの間女の子に会ったって言ってたよね？」

「そうだけど？」

「まさかとは思っけど・・・また正体ばらしたんじゃない」「ビクー！」ばらしたんだ」

ヒビキの反応に呆れるひとみ。

そんなこんなで現場に到着したヒビキ達。

一方

学校帰りのヴィヴィオ。今日はコロナとリオが一緒だった。

「今日どこいく？」

「アイス食べに行かない？」

コロナとリオの会話に少しポーっとしているヴィヴィオ。

「ん？ヴィヴィオどうしたの？」

「え？あ！うん！なんでもない！！アイス行こうアイス！！」

空元気を出し繁華街まで行ったヴィヴィオ達はアイスを買って食べ始めた。

「そういえば最近ヴィヴィオどうしたの？」

「へ？」

「元気ないみたいだけど」

「あ・・・それは・・・ん？」

リオとコロナの質問を誤魔化そうとするヴィヴィオの視線の先にある人物が・・・

「イルカがいるぞっ たくさんいゝるゝぞっ」

何故か奇妙な歌を歌っている中年。

「行こうよヴィヴィオ係わり合いにならない方が良いつて」

そう言うコロナだが中年にヒビキのような雰囲気を感じるヴィヴィオ。そして諦めたように結論を出した。

「違うよね」それじゃあヒビキさんにもよろしく言っておいてね」

「!!」

店の店主が中年に向かって言われた『ヒビキ』という言葉に反応するヴィヴィオ。

現場に到着したヒビキとひとみはキャンプ用具を準備しながら探索の準備も進めていた。

「全く・・・またばらしたんだ？」

「すみません」

ひとみに平謝りしているヒビキ。

「あのね・・・いつも言ってるでしょ。皆が皆ヒビキ君みたいに強いわけじゃないんだからね」

「そうは言ってもね・・・」

「いつその事その子弟子にしちゃえば？そうすれば大手を振って秘密共有できるし」

「いや・・・弟子はちょっと」

「もういい加減弟子取ればいいのにヒビキ君だってもうすぐ30になるんだから」

「ははは・・・」

苦笑いするヒビキに探索の準備が終わった。

「それじゃ」

アタツシケース一杯のディスクアニマルを起動させるひとみとヒビキ。

ディスクアニマルたちは周辺の探索を開始した。

「ねえ〜ヴィヴィオどうしたの？あのおじさんのこと追って」

「し！コロナちよつと黙って」

黙るコロナと口を塞ぐリオ。ヴィヴィオは先ほどの中年の後をずっと追っていた。

（なんか007みたいでわくわくするね）

（リオよくそんな事知ってるね）

リオのお気楽志向に緊張感がほぐれるヴィヴィオ。

するこ

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

中年の足が止まり何かを感じ取った表情になった。

「「「……」」」

息を呑むヴィヴィオ達

すると

「!?!」

中年が走り出した。

「!?!」

「ちよつとヴィヴィオ!」

「待って!」

中年を追うヴィヴィオとヴィヴィオを追いかけるコロナとリオ。中年はヴィヴィオ達よりも遙かに早く走っている中年にヴィヴィオは追いかけるのがやっとだが中年が公園を曲がった。

「あれ!?!」

中年を見失ったヴィヴィオ。

そこに

「ぜえぜえ……」

「ヴィヴィオ……はいよ……」

息が上がっているコロナとリオにヴィヴィオも緊張が解け疲労が
気に現れへたり込んでしまった。

「ほい」

「あ！どうも」

するとヴィヴィオ達の目の前に缶ジュースが現れ受け取ってしまう
ヴィヴィオ。

「ん？」

「よお」

「へ！！？」

先ほどの中年がヴィヴィオ達に缶ジュースを持って現れたのだった。

「なんか用か？さっきから人のあと着けて」

「ぜえ・・・ぜえ・・・ゴクゴク！！」

ジュースをがぶ飲みするリオ。そして声も出せないヴィヴィオを見
た中年は・・・

「なんだ？鍛えてないなあ」

「へ？」

陽気にヒビキと同じことを言う中年。

キャンプ地帯

「……………」

コーヒーを飲んでいるヒビキとひとみ。

「全く反省してるの?」

「してます……帰ったらフォローします」

「よろしい……ん?」

ヒビキとひとみの前に鷹が舞い降りるとヒビキが音角で記憶を読取る……………」

「当たり前だ」

「それじゃいつてらっしやい!」

「行ってきます……………」

ひとみに火打石の願掛けをしてもらい現場に急行するヒビキ。

そして

「ふふふ・・・」

「あははは・・・」

現場には猿のような姿をした童子と姫の姿が・・・

「ん？」

童子が何かに気づき振り返るとそこにはヒビキの姿が。

「鬼だ！」

「鬼だ!!」

音角を構えるヒビキは指で弾いた。

・・・キーン・・・

静かな響きと共に音角を額に構えるヒビキ。そして額に鬼の紋章が浮かび上がると発火した。

「はああああああああ・・・」

紫の炎と共につめき声が響き・・・

「ああ!!!!」

猛る叫びと共に鬼になる響鬼。

「！！！」

童子と姫も姿を変え響鬼に襲い掛かる。

「！！！」

飛び掛ってきた姫をすかさず鬼爪で倒す響鬼。

「ち・・・！！！」

童子が舌打ちすると響鬼をある場所まで誘い込んだ。

後を追いかける響鬼。

すると

「ぐ！！！」

同時に追った響鬼が巨大な腕に掴み取られた。

「もう成長したか！ぐう！！！」

巨大な猿のような生物・ヤマビコに握り締められる響鬼。そこに童子がヤマビコの腕を伝って響鬼にトドメを刺すべく接近した。

「はあ！！！」

「はあああああ!!」

すかさず鬼火で童子を焼き殺す響鬼。あまりの炎にヤマビコも握っていた腕を開いてしまい響鬼を話した。

「よつと!!」

着地する響鬼は音撃棒を構えると炎を巻き起こした。

「はあ!!」

音撃棒から放たれた烈火弾でヤマビコの顔面を焼き尽くす響鬼。

『ウオオオオオオオオオ!!』

烈火弾に怯んだヤマビコに向かって響鬼は音撃鼓を取り外しヤマビコに捻じ込んだ。

ヨオ!!

スイッチを押すと巨大な太鼓が描き出されヤマビコを仰向けに押し倒した。

『ウオオオオオ!!』

「は!!」

ダン!!

キーン……

響鬼が音撃鼓に向かって音撃棒を振り下ろすとすずかな響きが巻き起こった。

そして

ダンダンダンダン！！！

荒れ狂うような凄まじい打ち込みを見せる響鬼。ヤマビコがもがき苦しむと・・・

「はああー！！」

トドメの一撃が振り下ろされヤマビコが膨張し爆発した。

音撃棒を納める響鬼は顔の変身を解いた。

「ふう〜・・・あらー！！」

背中に痛みを感じるヒビキ。先ほどのヤマビコの握力でやられてしまったようだ。

「痛・・・ああ痛くない！！」

そう言って背中の傷を押さえるヒビキだった。

こうして魔化魍退治が終わり、たちはなに帰還するのだった。

たちばな クラナガン店

「ただ今」

たちばなに帰ってきたヒビキとひとみ。

「よっ おかえり」

「あーヒビキ……じゃなくておやつさんただ今戻りました」

おやつさんこと日高に挨拶するヒビキ。すると日高がヒビキの肩に手をかけた。

何やら真剣な目つきになる日高。

「……よおヒビキ……」近所さんに会ったんだって？」

「へ……」

（……なんで知ってるの？）

内心でそう思うヒビキに日高が視線をやると

そこには

「びびりも……」

気まずそうに挨拶するヴィヴィオ。ヴィヴィオ、コロナ、リオはその後日高によって案内され、ヒビキが帰るまでお茶とお菓子を「馳

走になっていたのだった。

「少女さん!!!?」

突然のヴィヴィオの登場に仰天するヒビキだった。

参之卷 たちばな（後書き）

ヒビキ

「そついえば少女さんどうしたの？」

ヴィヴィオ

「実は・・・ヒビキさんに相談が・・・」

日高

「おゝヒビキも結構もてるじゃねえか？」

ヒビキ

「今度はバケガニ？」

イブキ

「ヒビキ君に太鼓届けに行くんですけど一緒にいきます？」

四之卷 溶ける海

四之巻 溶ける海（前書き）

先日、感想で設定が活かし切れていないとの事でアドバイスをいただいたのですが、私が「わざとです」と返信したらその方はユーザーから退会されたようです。

意見を言っただけなのは大変うれしいのですが、言い逃げをして自分の発言に責任を持たない方の意見は遠慮したいと思います。

いつも見ていただいております。

私！高町ヴィヴィオは！クラナガンに住む小学三年生！

ヒビキさんって言う鬼に変わって人助けする人に出逢って・・・何かが変わってきました！

ヒビキさんに似た雰囲気のおじさんの後をつけてみるとあるお菓子屋さんに連れてこられて

そこにはヒビキさんが！

鬼・ヒビキ

夢・高町ヴィヴィオ

長・日高仁志

優・高町なのは

和・持田ひとみ

四之巻 溶ける海

四之巻 溶ける海

たちはなから出たヴィヴィオとヒビキは夕暮れの道を歩いていた。

「そついえば少女さんどうしたの?」

「ちよつと・・・相談が・・・」

ヒビキに胸のうちを明かすヴィヴィオ。

「ストライクアーツ?」

「はい・・・私もママ達みたいになりたくて・・・それにヒビキさんみたいに・・・」

「え?」

「なんでもないです」

ヴィヴィオの言葉を聞かないフリをするヒビキ。

「そつだなく自分の思うとおりにやってみるのもいいかもね」

「ヒビキさん？」

「考えないで踏み出してみなよ。そうすれば答えなんて後から付いてくるよ」

「・・・ヒビキさん」

ヒビキの前向きな言葉に少し軽くなるヴィヴィオ。

「それじゃ・・・そろそろ戻ろうか」

「はい！..！」

そう言ってたちばなに戻るヒビキとヴィヴィオ。

「おっそ〜い」

「ごめんごめん・・・」

リオとコロナを迎えに来たヴィヴィオ。尚二人はヒビキのツケという理由で団子を頼張っていた。

「じゃあね」

「はい」

ヒビキに見送られながらたちばなから帰るヴィヴィオ達。その様子を見ていた日高は・・・

「お〜ヒビキ〜結構もてるじゃねえか」

「おやつさん」

「いい子じゃねえか」

「おやつさん・・・そうですね」

「どうだい？あの子の事、弟子にするってのは」

「え？それは本人の意思ですし・・・」

「お前ならもう弟子をとつても良いんじゃないか？それに何だ？まだあの事気にしてるのか？」

日高の言葉に表情をしかめるヒビキ。

「ええ・・・僕が師匠になるなんて良いのになって・・・」

「まあ・・・あれから何年か経ってんだ・・・年相応に丸くなったし色々経験もした・・・そろそろ弟子を取ってみても良いんじゃないか？」

「・・・いや・・・その・・・考えておきます」

日高の言葉にタジタジになるヒビキ。

「お！ヴィヴィ王が弟子入り志願したら受け入れるって訳だな」

「おやつさん」

そう言って困り果てるヒビキだった。

翌日

「今度はバケガニですか？」

「たちはなのテーブルに地図が広げられバケガニと呼ばれる魔化魍の出現の対策を練っていた。」

「トドロキのやつが疲労でしくじったからお前に頼むんだけど」

「ええ……で？トドロキさんは？」

「一週間の入院で済むとよ……身体頑丈だからねあいつ……まっ……弦で倒すバケガニだけど太鼓で倒せないわけじゃないからお前に白羽の矢がたっ たって訳だ」

「はぁ……」

そう言ってひとみと共に現場に向かうヒビキ。

そして

「こんごちは〜」

入れ違いで入ってきたヴィヴィオ。

現場の海辺

「お！ヒビキ殿〜！にモツチー！」

到着したヒビキとひとみを迎える日菜佳。

「トドロキさんは？」

「今病院でして〜で〜この辺がですね〜幸いなんでもございますが〜童子と姫はトドロキ殿が倒してくれたので〜バケガニだけが相手でございますね〜」

「……そうですか……それじゃ後は任せてください」

「了解であります！」

後のことを任せトドロキのお見舞いに行く日菜佳。そして早速日菜佳の調べた場所を搜索し始めるヒビキ達。

岩場を探すとヒビキのキハダガニが反応を示した。

「……ここだな」

音角を構えるヒビキは……

……キーン……

静かな響きと共にヒビキが紫の炎に包まれた

「ああああ……はあっ!!」

猛る叫びと共に鬼に姿を変える響鬼。

「!!」

鬼の気配を感じたバケガニは早々に現れ響鬼に襲い掛かった。

「よつと!!」

音撃棒を構えバケガニのハサミを受け止める響鬼。響鬼に向かって前に走るバケガニ。

「い!かにつて横移動しか出来ないんじゃうわ!!」

バケガニに吹き飛ばされてしまう響鬼は岩壁で反転しバケガニの甲羅の上に降り立った。

「は!!」

音撃鼓をセツトする響鬼だが・・・

「えー！」

音撃鼓がバケガニの甲羅に吸収されてしまった。そしてバケガニから凄まじい量の酸が放たれた。

「うーく！」

酸で身体が焼け付く響鬼は怯んでしまつとバケガニのハサミに吹き飛ばされ海に叩き落された。

「うわあああああー！」

一方

たちはなでは日高とヴィヴィオがお茶を飲んでいた。

「んあゝ生憎ヒビキは出ちまつてさゝ」

「てことは・・・また魔化魍ですか？」

「おう！今度の奴はさバケガニって言うんだけどさ」

「おやつさん」

ヴィヴィオに魔化魍について語り始める日高を制止する女性の姿が・・・

「お〜？イビキ？」

「え？ヒビキ？」

日高のぼかした言い回しにヒビキと聞き取ってしまうヴィヴィオ。それを聞いた女性は呆れながら答えた。

「だから・・・イビキですって・・・ダメじゃないですか部外者に核心を話しちゃ」

「まあ〜硬い事言っなよアキラ」

「イビキです」

日高の言い回しに呆れるイビキ。

「早くトドロキさん退院しませんかね？」

「まあ〜トドロキも歳の割には現役だしね〜」

するとたちばなの電話が鳴りイビキが取った。

「はいたちばな・・・え？ヒビキ君が・・・わかりました」

そう言っって電話を切るイビキ。

「どうした？イビキ？」

「ヒビキさんがバケガニにやられたそうです」

「ヒビキさんが!?!」

ヒビキがやられたという事に驚くヴィヴィオ。

「太鼓が無くなってしまったそうです」

「そうか・・・よし!それじゃヒビキに太鼓届けに行ってくれませんか?」

「はい」

そう言っ準備をするイブキを見たヴィヴィオは・・・

「あの・・・私・・・帰ります」

そう言ってたちばなから出るヴィヴィオ。その姿を見た日高は・・・

「・・・イブキ」

「何ですか?」

「実はさあの子ね・・・ボソボソボソ」

イブキの耳元で何かを呟く日高。

「え?・・・そうだったんですか?」

「おっ」

日高の言葉にイブキは急いで支度し出発した。

「はあ……」

ヒビキを心配しながら帰路に着くヴィヴィオ。すると背後からバイクのクラクションの音が響き後ろに振り返った。

「こんにちは」

「あ」

振り返ると大型のバイクに跨ったイブキに挨拶されるヴィヴィオ。するとイブキはバイクから降りヴィヴィオに話しかけた。

「あなた猛士ですね」

「え？猛士じゃないです！ヴィヴィオです！」

ヴィヴィオに反応に笑うイブキ。

「ははは。そのギャグ珍しく聞きました。これからヒビキ君に太鼓を届けに行くんですけど一緒に行きますか？」

「え？」

イブキの誘いに驚き同行する事にしたヴィヴィオ。

「痛たた・・・」

一時キャンプに戻り怪我の治療をしているヒビキとひとみ。

「全く・・・ヒビキさんと同じ失敗して・・・」

「・・・面目ありません・あた!!」

ヒビキにわざとぎつく包帯を巻くひとみ。

「ん？安達君来たよ」

「あー」

ヒビキ達の下にバイクで駆けつけるイブキとヴィヴィオ。

「ヒビキ君。はい」

「どうも」

イブキのバイクの後部座席から降りるヴィヴィオ。

「イブキさん・・・え？少女さん!？」

「どづしたの?」

突然のヴィヴィオの登場に目をぱちくりさせるヒビキとひとみ。その様子を見たイブキは・・・

「いや。ヒビキ君がピンチなら弟子の彼女が居た方がいいと思いまして」

「弟子？私が？ヒビキさんの？」

自分を指差し混乱するヴィヴィオ。その様子を見たイブキは・・・

「違うんですか？」

「違ってます！」

「違う」

「違います！」

「あれ・・・おやつさんからそう聞いたんですけど・・・じゃあ彼女は？」

混乱するイブキにヒビキ達は・・・

「・・・ごく最近知り合った？」

「ご近所の？」

「友達だよ」

ヴィヴィオ、ひとみ、ヒビキの順に考察の会話が進みいっぱい食わ

されたと思うイブキだった。

とりあえず太鼓を受け取ったヒビキは治療に専念している。用件を終えたイブキはヴィヴィオに呼びかけた。

「それじゃヴィヴィオちゃん帰りましょう」

「はい」

そう言っつてイブキと一緒に帰ろうとするヴィヴィオをヒビキが止めた。

「もう少ししたら僕が送ってくよ」

「・・・ヒビキさん」

「まあヒビキ君がそう言うなら。ヴィヴィオちゃんもそのほうが良いみたいですし私は先に帰りますね」

「あ！イブキさん！ありがとうございます！」

「それじゃあ」

そう言っつとイブキはバイクに跨り帰っていった。

「で？少女さんどうしたの？」

「はい・・・私もヒビキさんみたいにストライクアーツで鍛えてみたんですけど・・・上手くいかなくて」

すると音角を持ってヴィヴィオに微笑みかけるヒビキ。

「これを目指して鍛え続けてきました・・・まだまだ少女さんには
負けません」

「・・・ヒビキさん」

「けどね・・・ここだけは鍛えようよ」

自分の胸を指してヴィヴィオにそう言うヒビキ。

「ヒビキ君！あたり！」

キハダガニの点検をしていたひとみが当たりを引くとヒビキが準備
をし始めた。

「それじゃあ・・・行ってきます！シュッ！！」

そう言うて現場に急行するヒビキを見送るヴィヴィオ。その姿を見
たひとみが・・・

「ヒビキ君ね・・・一度鬼になることを諦めた事が会ったんだ・・・
」

「え？」

「けどね・・・鬼にならないといけなくなった事があったの」

「鬼に・・・ならないといけなくなった事？」

ヒビキとて迷っていたことがあったということを知らされるヴィヴィオ。そんな姿を見ると・・・

「私！やっぱり一人で帰ります！ヒビキさんにもそう伝えておいてくださいー！」

何かを吹っ切りひとみに挨拶するヴィヴィオはそのまま駅まで向かった。

かつてヒビキが突っ走ったように突っ走ってみるヴィヴィオ。

一方

「・・・・・・・・・・」

バケガニが待機している洞窟に辿り着いたヒビキは音角を構え指で弾いた。

・・・キーン・・・

静かな響きと共に音角を額に掲げると鬼の紋章が浮かび上がり紫の炎が発火した。

「あああああ・・・はあっー！！」

猛る叫びとともに炎を吹き飛ばすと姿を変えた響鬼。

『シャアー』

響鬼の姿を感じ取ったバケガニは目を光らせ響鬼を迎え撃つべく姿を現した。

「第二ラウンド・・・」

音撃棒を構えた響鬼は力を込めた。

「はあああ・・・」

周囲から赤い気を放出させると音撃棒から炎の刃が現れた。

烈火剣だ。

『シャアー!!』

「はあ!!」

迫り来るバケガニのはさみを烈火剣で斬る響鬼。するとバケガニはうめき声を上げ響鬼に向かって酸を放った。

「はあ!!」

酸を浴びながらバケガニの足を斬る響鬼はバケガニを仰向けに倒し音撃鼓を捻じ込んだ。

ヨオ!!

スイッチを入れると音撃鼓が展開され巨大な太鼓が描き出された。

「はあ!!!」

キーン

そのまま音撃棒を振り下ろす響鬼。すると静かな音が響き音撃棒を叩き込んだ。

「はあ!はあ!!!」

清めの音を打ち込む響鬼に向かってバケガニは苦し紛れに酸を放ち響鬼を退かそうとするが響鬼は構わず清めの音を打ち込み続けた。

「はあ・・・はあ!!!」

トドメの一撃を入れる響鬼。するとバケガニは膨張し爆発した。

「よっ」と

音撃棒を回し着地する響鬼はそのまま顔の変身を解いた。

「ふうく・・・いたく」

しかし身体に刻まれた酸は思ったよりダメージが大きかった。

一方帰路のヴィヴィオは・・・

「ノーヴェへ・・・明日赤心寺から修行を終えて帰ってきたらまた特訓ヨロシクね」

そうノーヴェにメールを打った。

四之巻 溶ける海（後書き）

日菜佳

「ヴィヴィオちゃんなんかどうです？ヒビキ君の弟子に」

ヒビキ

「ぶー！」

ノーヴェ

「おめえがヒビキか」

ヴィヴィオ

「え？じゃあ鬼って鍛えれば誰でもなれるんですか！？」

日菜佳

「鍛え抜かれた心と身体を更に鍛えて鍛えて鍛え抜いてはじめて鬼になれるんです」

伍之巻 叩く魂

伍之巻 叩く魂（前書き）

私！高町ヴィヴィオはクラナガンに住む小学3年生！

ヒビキさんって言う鬼に変わって人助けする人に出会って・・・

何かが変わってきました！！

私の相談に乗ってくれるヒビキさん・・・そんなヒビキさんにも私と同じ迷っていた時期があったみたいで・・・

鬼・ヒビキ

夢・高町ヴィヴィオ

長・日高仁志

優・高町なのは

和・持田ひとみ

伍之巻 叩く魂

伍之巻 叩く魂

高町家

「よっヴィヴィオ」

ザックを背負ったノーヴェが赤心寺から修行を終えて帰ってきた。

「ノーヴェ！」

ノーヴェに駆け寄るヴィヴィオ。

「おかえり ノーヴェ」

「んじゃ早速訓練するか？」

「うん！」

やる気満々のヴィヴィオだが・・・

「けどその前に・・・ちばなに連れてってくれねえか？」

「え？」

ノーヴェの突然の提案に驚くヴィヴィオ。

たちばな

「ええつと・・・これは持った・・・水筒も持った・・・」

何やらザツクに色々詰め込むヒビキ。しかし今回は魔化魍退治ではなかった。

「よく忘れもんねえか？」

ヒビキに声をかける日高。準備を終えたヒビキはとりあえず一服お茶を飲んでいた。

すると

「あら〜二代目ヒビキ殿〜」

お弁当を持って現れる日菜佳。

「日菜佳さん」

「ヒビキ殿もそろそろ良い御歳ですし、弟子でもとってみれば良いんじゃないですか」

「いや・・僕は」

「ヴィヴィオちゃんなんかどうです？ヒビキ殿の弟子に」

「・・・」

日菜佳のお気楽な言葉に黙ってしまつヒビキ。すると時計を見て・

「あ！電車で遅れちゃう！」

逃げるようにたちばなを出るヒビキ。

そして

「こんにちは」

「うっす」

再びヒビキと入れ違いになりたちばなに訪れるヴィヴィオ。今日はノーヴェ、ウエンデイ、セインも着ていた。

「おお、ヴィヴィオちゃんいらっしやい」

ハイテンションの日菜佳に迎えられるヴィヴィオ達。

「ここがたちはなっスか」

「ここにあの鬼さんが・・・」

たちはなを見回すウエンディとセイン。ノーヴェがヒビキに会いにたちはなに行くという情報をどこからか嗅ぎつけ始めてヒビキと戦った者としてヒビキの根城を拝む・・・

というのは建前でただ甘い物を食べたかっただけであつた。

「いやいやお話は伺つておりました〜 どうぞ〜」

再びヒビキのツケということで気前良く団子を振舞う日菜佳。ウエンディとセインは遠慮なく食べ始めた。

「今日はヒビキさんは？また魔化魍ですか？」

「いえいえ〜今日は魔化魍ではなくてですね〜電車です〜駅くらいのところに鍛えに行つたんっすよ〜」

「鍛えにつて・・・鬼にですか？」

「と言うよりも鬼になる力を弱めない為に鍛えにいったんすね〜」

日菜佳の言葉に凍るヴィヴィオ達。

「え？・・・つまり・・・鬼つて鍛えれば誰でもなれるんですか？」

「はい」

あっさり応える日菜佳にウエンディとセインは・・・

(なぬ！！あの人身体鍛えただけツスカ！？)

(・・・あたしただ身体鍛えただけの人に負けたんだ)

ある意味改造手術をされた身としては、身体を鍛えた延長線上でしかない人物に負けたことが悔しいらしい。

「そうなのか・・・」

一人納得するノーヴェ。ノーヴェも赤心寺で鍛えている。

「鍛えれば・・・誰でも鬼に・・・」

「そうっすね〜けどヴィヴィオちゃん普通鬼になろうと思えますか？」

「え？」

日菜佳の言葉に鬼になる自分を想像してみるヴィヴィオ。

想像中

・・・キーン・・・

「はああああ・・・はああー!!」

想像終了

）・・・かつこいいかも

等と思うヴィヴィオだが

「・・・普通はならないっすね」

「・・・そうだね」

「へ？」

身体を鍛えただけの人間に負けたという事で少し不機嫌になったウ
インディとセインの言葉に黙ってしまうヴィヴィオ。

「ですよね〜 つまり普通はならないしなれないんですよ〜鍛え抜
かれた心と身体を更に鍛えて鍛えて鍛え抜いて始めて鬼になれるん
です」

「ふうん鍛えるのか」

お茶を飲みながら考えるノーヴェ。

「もしかしたらノーヴェならなれるかもね鬼に」

「ああ、鬼になったら変身解除するとすっぱんぼんになるんで注意
つすよ」

日菜佳の一発にセインが・・・

「なら丸出しになったノーヴェの胸もんで・・・敬介呼んだろう
か？こら」ひ！！」

セインに対し仮面ライダーXこと神敬介を呼ぶと脅すノーヴェ。

その理由は

JS事件時

「とりゃあー！！」

「とおー！！」

敬介と戦うセイン。両者の戦いは五分といったところか経験の差で敬介の方が上手だった。

「く！」

ディープダイバーで逃亡を図ろうとするセインだが・・・

「とお！」

「な！！！」

すかさず敬介に羽交い絞めにされるセインすると敬介の中のマーキユリー回路が発動した。

「真空！！地獄車！！！！！」

「あれええええええええええ！！！」

敬介に何度も顔を大地に叩きつけられるセイン。戦意喪失すると打ち上げられ×キックでトドメを刺された。

これでも『手加減』した為、致命傷にはならなかった。

が

セインにとってトラウマになったのだった。

「嫌だあああああああああああ！あれもう一回食らうのだけは嫌だああああああ！」

トラウマが再燃し絶叫するセインだった。

そんなセインを無視し日菜佳がヴィヴィオに耳打ちをした。

「・・・ヴィヴィオちゃん〜ヒビキ君の弟子なんてどうっすか？」

「へ？」

「いや〜私共としても〜ヴィヴィオちゃんがヒビキ君の弟子になれば色々楽しいかな〜と」

「・・・弟子になる・・・私が？・・・ヒビキさんの？」

「まあ〜鬼の弟子も大変ですしね〜毎回毎回魔化魍退治に引っ張りまわされますから〜」

日菜佳のその言葉に・・・

（・・・考えてみようかな・・・）

等と思うヴィヴィオだった。

「日菜佳さんお茶〜」

「お団子〜」

「はいはい」

そう言っつてウエンディとセインに接客する日菜佳と席から立つノーヴェ。

「どじしたの？」

「ちょっと行っつてくる」

そう言っつてたちばなから出るノーヴェだつた。

とある寺院

「鍛えろっつでっつをっ足をっらんらん」

呑気に歌いながら境内を登っつて鍛えるヒビキ。

「よっつと！ほっつ！！」

巨大な岩を足で押し上げ筋力トレーニングをするヒビキ。理論など関係なくひたすら身体を鍛えていた。

「走ろっつ山をっ谷をっらんらん」

ランニングを終え一休みをすつと・・・

「んっ」

何かの気配に気づいたヒビキ。その先に居たのはノーヴェだった。

「どちら様ですか？」

「おめえがヒビキか？」

「そうですね……！！」

いきなりヒビキの顔面に向かって拳を突き出すノーヴェ。ヒビキの顔面の寸前で止まるノーヴェの拳。

「へえ……結構度胸があるじゃねえか」

「……それはどうも」

「へへ……ん？」

何かに気づくノーヴェ。カウンターで自分の腰元にヒビキの拳が突き刺さりそうになっていることに気づいた。

「……やるじゃん……流石ヴィヴィオが見込んだだけあるね」

「へ？少女さんの知り合いですか？」

とりあえず寺院内で再びお茶を飲むヒビキとノーヴェ。

「……どうしたんですか？」

「いや……ちょっと会ってみたくなくてさ」

「はぁ・・・」

ノーヴェのテンションについていけないヒビキ。

ノーヴェがふと寺院の庭を見ると・・・

「・・・梅の花」

「ちよつと早咲きみたいだね」

梅の花に思入れがあるノーヴェ。その理由は・・・

「・・・赤心少林拳って知ってるか？」

「え？」

「荒々しい戦いの中でも梅の花を美しいって思う心が重要なんだと・・・」

「へえ・・・」

すると立ち上がり庭に立つノーヴェは赤心少林拳の型を取った。

「すう・・・」

手に梅の花を描き型を決めるノーヴェ。荒削りだが優雅な型は師匠でもある一也に勝るとも劣らない。

それを見たヒビキは・・・

「・・・凄い・・・一瞬見とれちゃいました」

「まだまだ修行中だが・・・まだ完全な型は教えてもらってないんだ」

「・・・そうですか・・・今度は僕が」

太鼓の撥を持って寺院に飾ってある巨大な太鼓に向かって立つヒビキ。

「すう・・・は!!」

優雅にそして力強く太鼓を叩くヒビキ。

その姿に感心するノーヴェ。

「はあ!はあ!はあああああ!!はあ!!」

ドンドン!!

最後の締めを見せられるとヒビキはノーヴェに振り返った。

「中々やるじゃねえか?」

「どうも」

「そういえば・・・お前どうして鬼になったんだ?」

ノーヴェの質問に少し表情を沈めるヒビキ。

「どうした？」

「いえ・・・ちょっと・・・死んだ戦友との約束・・・ですかね？」

苦笑いしながら言うヒビキにノーヴェは・・・

「そっか・・・悪いこと聞いたな・・・」

「いえ・・・そうだ良かったら一緒に鍛えませんか？」

「ほう、面白そうじゃねえか・・・んじゃよろしくな」

「はい！」

こうして今日一日ヒビキの特訓に付き合ったノーヴェだった。

尚帰った時にウェンディとセインが食べ明かした団子とお茶代でヒビキが泣きを見たのは黙っておこう。

その夜の高町家

「・・・ねえママ？」

「ん？どうしたのヴィヴィオ？」

「・・・ママは私が鬼になりたいって言ったらびびり思ひ？」

「は？」

何の突拍子もなく無茶を振られたのは。そして考えると

「うーん……ヴィヴィオがちゃんと考えて出した結論なら反対しないよ……」

「ホント!?!」

「ええ……ああ……うん」

ぱあっと表情が明るくなるヴィヴィオは、「ご機嫌で部屋に帰ると……」

(どうしたんだろうヴィヴィオ……まさか!初恋!?)

要らぬ心配をするのはだった。

伍之巻 叩く魂（後書き）

イブキ

「イッタンモメンですか？」

日高

「おう！というわけでお前の出番だ」

ヴィヴィオ

「え？イブキさんも鬼になれるんですか！？」

イブキ

「もう一つの鬼を見てもらいます」

六之巻 息吹く鬼

六之巻 息吹く鬼（前書き）

私！高町ヴィヴィオは・・・クラナガンに住む小学4年生！

ヒビキさんって言う鬼に変わって人助けする人に出逢って

何かが変わりました！！

今日で4年生に進級した私は早速ヒビキさんに報告しに行きます！

そして・・・

鬼・ヒビキ

夢・高町ヴィヴィオ

長・日高仁志

優・高町なのは

和・持田ひとみ

風・イブキ

王・畢

六之巻 息吹く鬼

六之巻 息吹く鬼

本日のヴィヴィオは4年生に進級しご機嫌である。

「　　」

「……」

スバル・ナカジマの娘・畢・ナカジマを連れてたちはなに向かっていた。

本日・スバルが出張に出かける為、畢を預けたのだがヴィヴィオが面倒を見ると張り切っていたのだ。

畢は肉体年齢こそ母であるスバルと同年代だが精神年齢のほうは約5歳児並なので普段は変身魔法で5歳児の姿になっている。

その為ヴィヴィオは畢に兄貴風ならぬ姉貴風を吹かせていた。

現在の畢の姿は子供の頃のスバルが長いストレートヘアで半目開きになった姿である。

「……ヴィヴィオ姉ちゃん何処行くの？」

「たちばなっつて言うお団子屋さん美味しいよ」

「・・・ジュルルコクリ」

涎を押さえながらヴィヴィオに付いて行く万年食欲の畢。

その後ろで・・・

「ねえなのは・・・本当に着いて行く必要あるの？」

「ユーノ君はヴィヴィオが心配じゃないの？」

「・・・それは分かるけど・・・過保護じゃない？」

管理局の仕事をサボってヴィヴィオの後をつけるのはとユーノ。

大の大人が2人が後を着けていると目立つが

読者の方はお忘れであろうか・・・

ユーノがフェレットに変身できることを・・・

なのはもユーノを脅して無理矢理変身魔法を習いヴィヴィオの後を着けていた。

だが

「ん？」

「ピッちゃんどうしたの？」

「変な生き物が二匹後着けてる？」

畢のアホ毛という名の触覚がなのはとユーノを既に捉えていた。

曲がりなりにも世紀王と同等の力の身体のせいか畢は人より感覚が優れているのだ。

・・・しかし

「・・・美味しくなさそうだから放つとこっ」

「そうだね」

悪意はないため放っておくことにし、たちばなに着いたヴィヴィオと畢だった。

たちばな

「いらっしゃいー」

「こんにちは」

「コクリ」

ヴィヴィオが来た事に挨拶する日高。ヴィヴィオは挨拶し畢は無表

情で頷いた。

「おう〜ヒビキ〜ヴィヴィオが着たぞ〜」

「あ！少女さんいらっしやい」

日高に呼ばれヴィヴィオと畢の前に現れるヒビキ。早速団子を用意し談笑を始めるヒビキ達。

「こんにちは〜少女さん」

「こんにちは〜今日は魔化魍じゃないんですか？」

「そんなに毎日毎日魔化魍と戦いに行かないよ」

ヴィヴィオの質問に笑って答えるヒビキ。

すると

「はぐはぐはぐ」

トドロキが食べた量以上ある団子を食べている畢。

母親に似たせいか食べ盛りなのか食欲旺盛である。スバルとの違いは見境の無い食欲だけだった。

「おう！良い食べっぷりじゃねえか！気に入った！どんどん持って来い！」

「はいはい」

そう言っでとんどん団子を持つてくる日菜佳。

「まあ、話を戻すけど・・・今日魔化魍退治に行くのは」

「私です」

奥から出てきたイブキ。

「え？イブキさん？・・・え！イブキさんも鬼になれるんですか！？」

「・・・ええ」

イブキのような女性が鬼になれる事に驚くヴィヴィオ。

「今度はイッタンモメンですか」

「おう！と言っわけでお前の出番だイブキ」

「はい・・・先にへびたちに探らせておいたので場所は分かってます」

そうして準備を始めるイブキ。

「送りましようか？」

「いえ・・・相手はイッタンモメンなのでヒビキ君が来ても陣中見舞いにしかなりません」

そうやって先代イブキから受け継いだバイク、竜巻に乗って現場に向うイブキだった。

その頃

「ハグハグハグ」

畢の食べた量がとんでもない量になっていき流石に青ざめ始めるヴィヴィオ。

「こりゃ・・・おまけにしてやれるほどの量じゃねえな」

苦笑いする日高にヴィヴィオは覚悟を決めた。

「ええ〜い!!!全部持ってけえええ!!!」

そうやって財布を逆さにするヴィヴィオが入っていたのは・・・

ゴトン

日本円にして500円玉1個

描写はわかりやすく500円玉落ちたところを想像していただきたい

「こりゃ全然たりねえな・・・」

「はっ・・・」

日高に指摘され凹んでしまつヴィヴィオを見かねたヒビキが・・・

「あ・・・じゃあ今日も僕のツケで良いです」

「よっしや・・・」

そう言つて納得する日高。

その時

「あのお茶のおかわりもらえます?」

お客さんのお婆さんがお茶のおかわりを要求してきたが今手を離せないヒビキ達

すると

「わたしやります!!」

そう言つて湯のみを持って奥に行くヴィヴィオの姿を見た日高は閃いた。

その結果

「いらっしゃいませ」

たちはなの制服に身を包み接客を始めるヴィヴィオ。

「飲み食いした分は労働で払ってもらおうか」

「・・・シビアですね」

「ちゃんとケジメはつけねえとな」

意外にスパルタな日高だった。

そして

「む！ヴィヴィオが不当に働かされてる！」

「なのは！落ち着こうね！」

天井から見守るフェレットが二匹。もう過保護通り越して親ばかりであつた。

一方

湖を走るイブキ。その姿を見ていた童子と姫はイブキの元に舞い降りた。

「!!!」

童子と姫の出現にバイクを停めるイブキ。

『シャアア!!』

童子と姫は異型の姿を現しイブキに襲い掛かるとイブキは童子と蹴り飛ばし姫の攻撃を避けた。

「もう一つの鬼の姿・・・見てもらいます」

そう宣言するイブキ。

そして

「!!!」

ホイッスルのような笛・変身鬼笛・音笛を構えるイブキ。

『シシシャー』

そんな童子と姫を見つめるイブキは音笛を吹いた。

ヒュルリリ・・・

音笛から静かな音色が奏でられるとイブキは音笛を額に掲げた。

「……!!」

そのまま音笛を持っている腕を振るうと凄まじい竜巻が巻き起こりイブキの身体を包んだ。

「……は!!」

竜巻を手刀で切り裂くと現れたのは

威吹

鬼

威吹鬼

青い戦鬼・威吹鬼が現れた。

『しゅ!!』

童子と姫の攻撃を蹴りでかわす威吹鬼はバイクから音撃管を取り出

し銃撃した。

「!!!」

威吹鬼の音撃管の連射で沈む姫。狙いを童子に帰る威吹鬼は音撃管を発射する。

『シャアアアア』

童子が威吹鬼に襲い掛かると威吹鬼は腕に風を纏い手刀で切り裂いた。

沈む童子すると湖から凄まじい波が起こった。

「ん？」

威吹鬼がその波に気づくと湖からイッタンモメンがせり上がって来た。イッタンモメンの突進を避ける威吹鬼は音撃管の弾丸を切り換えた。

「はっ!はっ!」

音撃管から発射される紅い弾丸・鬼石。次々とイッタンモメンに鬼石を打ち込みベルトのバックルを外し音撃管に連結させ組み替えた。

「ん?くっ!!!」

イッタンモメンの攻撃を避けると完成したトランペットのような音撃管・烈風を構えた。

PUUUUUUUUU!!!

イッタンモメンに向って烈風を奏でると凄まじい波動がイッタンモメンを包み込んだ。するとイッタンモメンに打ち込まれていた鬼石が弾けた。

『グウウウシャアアアアアア!』

悶絶するイッタンモメンに追撃の音を奏でる威吹鬼。

PUUUUUUUUUUU!!!PUUU!!!

『シャアアアアア!』

再度、波動を打ち込まれ鬼石と共に爆発するイッタンモメン。

魔化魍が退治された事を確認すると威吹鬼は顔の変身を解いた。

「ふう・・・こっちは終わりました・・・」

何とか早期決着が出来たイブキは着替えると竜巻に跨りたちばなに帰っていった。

たちばな

「終わった・・・」

たちばなで仕事を終えたヴィヴィオはグロッキー状態になり畢に至ってはボケーっと団子を加えていた。

「よっ！」「くるうさん！！はいよ！バイト代」

そう言っつてヴィヴィオにバイト代の入った封筒を渡す日高。ヴィヴィオがバイト代の封筒を見ると・・・

「え！こんなにたくさん！？」

「まあ〜ヴィヴィ王はよく働いてくれたし〜ボーナスって訳で。あ！団子代は差っ引いてあるから」

ちゃっかりしている日高。それでも十分おつりが出ていた。

「よっし！ヒビキ！ヴィヴィ王とヒツちゃんを送ってけ！」

「はい」

そう言っつてヒビキと一緒に帰路に着くヴィヴィオと畢。

そしてこの二人も

「なのは〜もう帰ろっよ・・・」

「そうだね・・・ヴィヴィオ・・・立派になっつて」

そう思っつて撤退を試みようとするフェレット二匹は背後から何者かに突っつかれた。

「へ？」「

なのはが振り返るとそこには鷹、狼、猿が・・・

「ぎゃー！ー！」

「うわー！ー！」

そのまま鷹と猿に日高の元に連行されるのはとユーノ。

「さあってお母さん・・・ちょっと過保護過ぎやしませんか？」

「えっとそのー！」

フレット形態でタジタジになるのは。

「ちょっとお話ししましょうか」

「・・・はい」

そう言っただけで日高にお話されるのはだった。

帰り道

畢を送ると帰ってきたスバルから謝られまくりながらヴィヴィオが建替えた団子代を受け取り今度はヴィヴィオを送っているヒビキ。

「もうスバルさん私ヒツちゃんのお姉ちゃんだし良いのに」

「そうなの？」

「うん！あーヒツちゃんも変身できるんですよ」

六之巻 息吹く鬼（後書き）

ノーヴェ

「お前ヴィヴィオの事どう思ってたんだよ？」

ヒビキ

「僕としては・・・弟子にしたつもりで言うか・・・鬼としてじゃなくて・・・」

????

「ストライクアーツ有段者・そして赤心少林拳免許皆伝・ノーヴェさんとお見受けします」

ノーヴェ

「見せてやるよ・・・赤心少林拳の冴え」

七之巻 赤心少林拳対カイザーアーツ

七之巻 赤心少林拳対カイザーアーツ（前書き）

私！高町ヴィヴィオは！クラナガンに住む小学4年生！

ヒビキさんって言う鬼に変わって人助けする人に出逢って・・・何かが変わり始めました！！

ヒビキさんの弟子入りを志願した私・・・けどヒビキさんの答えは・・・

鬼・ヒビキ

夢・高町ヴィヴィオ

長・日高仁志

優・高町なのは

和・持田ひとみ

風・イブキ

赤・ノーヴェ・ナカジマ

七之巻 赤心少林拳対カイザーアーツ

七之巻 赤心少林拳対カイザーアーツ

たちばな

何やら考え込んでるヒビキと日高。そして帰ってきたイブキが訊ねてみた。

「おやつさんは何考えてるんですか？」

「ん？いやな・・・この世界に派遣されてから思ったんだけどさ、この世界って猫耳とか犬耳とかの獣人が多いじゃん？」

「え？おやつさんそういう趣味が？」

「なわけないでしょ良い歳こいて・・・んでさ思ったのはさ・・・本来の人間の耳があるところには何かあるんだろってな〜って」

「「あ？」「」

言われてみたら確かにと思ったヒビキとイブキ。

「いつも都合よくもみ上げとかで隠れてるじゃん？今度アルフのお嬢ちゃんにでも見せてもらうかい？」

「いや・・・おやつさん止めたほうが良いですって」

「なんで?」

「直々に頼んでも見せてくれる人なんて1人も居ませんって・・・
変態扱いされちゃいますよ・・・」

「だよな」

イブキにつっこまれ自分で笑い転げる日高。

そして

「ヒビキ君はどうしたんですか?」

「実は・・・少女さんに弟子入りを志願されて・・・」

その言葉に仰天する日高とイブキ。

「お!やったじゃねえか!ヴィヴィ王ならお前の弟子として十分素質あるって」

「いえ・・・断ったんです」

「「え?」」

ヒビキの言葉に驚く日高とイブキ。

「どっしって?」

「中途半端に鬼になるのを投げた僕に弟子をとる資格はありません」
そう言っただちはなの部屋に入るヒビキだった。

高町家

日高にコツテリお話されたなのはとユーノ。そしてヒビキと話をしたヴィヴィオ。

「今日は散々だったね・・・なのは」

新聞読みながらぶつたれるユーノ。

「ユーノ君・・・今度はあの日高さんに見つからない補助魔法教えてね」

「て！なのはまだやるの！？いくらなんでも」

嫌がるユーノになのは・・・

「へえ〜いいんだ〜分かったよ・・・こうなったら司書のみんなにユーノ君に恥ずかしい話洗いざらい吐いちゃるー!!」

かさりと新聞落とすユーノ。

「ななな何を言ってるのなのは!！」

「へ? パパ恥ずかしい話なんてあるの?」

「そ! そんなもんじゃないよ!！」

ヴィヴィオの質問を否定するユーノだが・・・

「へえ〜じゃあ10年前のはやてちゃん家でやった女装コスプレ事件はどうお〜?」

「ビク!！」

「え? 何ママその事件」

「10年前にはやてちゃん家でコスプレパーティーがあつてね〜それでユーノ君はあるところか女装してノリノリだったんだよね〜いや〜いくら私でも可愛すぎて嫉妬しちゃったな〜」

「て! あれははやて達が無理矢理!！」

「良いのかな〜女装でノリノリ〜因みにこれ写真ね〜これを無限書庫に張り出しちゃおうかな〜ていうかユーノ君今日女装してみる?」

おもむろにホテル・アグスタで自分が着たドレスをユーノに突きつけるのは。

「にゃ! にゃのは! 僕を脅迫するの!？」

「脅迫なんてしてないよ〜誠心誠意お願いしてるんだよ〜」

黒笑みを浮かべて呂律が回らないユーノに『お願い』するなのは。

(何となく結婚してからの立場が分かるな……)

等と当人達より大人の解釈をするヴィヴィオ。

するとやっとなのはがヴィヴィオが浮かない顔をしていることに気づいた。

「どうしたの？ヴィヴィオ？」

「あ……いや……今日ね……ヒビキさんに弟子入りお願いしたんだ」

「へえ〜で？」

「……断られちゃった」

ヴィヴィオの浮かない顔を見たのは……

「う〜ん……よくわかんないけど……ヒビキさんにはヒビキさんの考えがあるのかもね〜」

「そっか……」

なのはに言われトボトボ部屋に戻るヴィヴィオ。

「なんかヴィヴィオ・・・今日は本気で落ち込んでたね」

「これは明日雨かな？」

等と会話が進むユーノとなのは。

「はあ・・・」

ヒビキに言われたこと思い出しながら部屋のベッドで横になるヴィヴィオ。

(え？ちよつと待つてください！少女さんよく考えたの？そんな簡単に鬼の弟子になるなんてもっと考えなさいよ)

「私みたいな女の子が鬼になるのはダメなのかな？・・・けどイブキさんだって女の人だし」

ヒビキの言葉に真剣に悩むヴィヴィオ。だが考えれば考えるほど煮詰まってしまった。

「はあ・・・本でも読もう」

気晴らしに本棚をしてみるヴィヴィオ。

すると

「ん？」

ふと以前ユーノが持ってきた聖王と七人の戦鬼という本が眼に入り
手にとつて見た。

そのままあらすじを読んでみるヴィヴィオ。

「えつと・・・古代ベルカ時代・・・聖王家と霸王家を和解させる
べく聖王と共に戦った鬼・・・その鬼の名は・・・響鬼!？」

かつて聖王と共に戦った鬼の戦士の名が響鬼である事に驚くヴィ
ヴィオ。

「パパ!?!」

「ん？」

急いで本をユーノの居る書斎に持っていくヴィヴィオ。

「どうしたの?ヴィヴィオ」

「パパ!これって実話なの!？」

古代ベルカ時代のこと書かれている本。ユーノ曰くこの本は昔の
文献を物語のようにアレンジをしているらしいが殆ど99.9%実
話らしい。

そこに書かれていた響鬼という鬼のことをユーノに話してみると・

「うん・・・これはもしかしたら昔のヴィヴィオとヒビキさんの
物語かもね・・・」

「え？昔の私って私クローン……」

「いや……そうじゃなくてヴィヴィオの前世とヒビキさんの前世・
・つまりヴィヴィオとヒビキさんが生まれ変わる前の話かもしれ
ないよ」

「前世？生まれ変わり？ああ〜そういう考え方もあるんだ〜」

ユーノに言われた『輪廻転生』概念の無かったヴィヴィオは新鮮な
気持ちになった。

「……今度ルーちゃんと一緒に見てみよう……」

そう言ってヴィヴィオは本を大切にしまった。

翌日

「おい！ヒビキー!!」

たちはなに怒鳴り込んできたノーヴェ。

「おいノー兵」

ノーヴェを向える日高。

「……おやつさんヒビキを出せ」

「あ？はいはいヒビキ〜ノー兵が呼びだぞ〜」

「て・・・おやっさん人に変なあだ名つけないでくれよ」

ヴィヴィオとノーヴェに変なあだ名をつける日高を呆れるノーヴェ。すると奥から出てきたヒビキ。

「あれ？ノーヴェ？」

「おうヒビキ！お前どういっつ見だ？」

「へ？」

行き成り文句を言われタジタジになるヒビキ。

「昨日ヴィヴィオからメールがあって弟子断られたって・・・お前ヴィヴィオが望んだら弟子にするって言ってたじゃねえか」

ノーヴェの言葉に詰まってしまっヒビキ。

「お前ヴィヴィオの事どう思ってたんだよ？」

その言葉に・・・ヒビキは・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・弟子？」

「だったらー！」

「いや・・・・・・・・僕としては・・・・・・・・弟子にしたつもりって言うか・・・鬼としてじゃなくて・・・」

「ああ〜もうはつきりしねえな！男だったらはつきりしろよ！！」
ヒビキに詰め寄るノーヴェエその言葉に・・・

「その・・・本当に僕なんかで良いのか・・・それにイブキさんなら同じ女性同士だし・・・」

「ヴィヴィオがおめえが良いって言ってんだからそれで良いだろうが！！」

「はーはい！！」

ノーヴェエに怒鳴りつけられてしまいタジタジになるヒビキ。

「よ〜し言ったからな。今度ヴィヴィオに会うまでに考えておけよ」

「は・・・はい」

既にはいとしか言わざるを得ないヒビキ。言いたいことを言ったノーヴェエは満足そうに帰っていった。

「凄い勢いだっとな・・・」

「あそこまで強引なのは良いところであり悪いところでもありますね・・・」

日高とイブキにそう分析されてしまったノーヴェエ。

「あ〜ど〜ど〜」

「まあ、あそこまで言われちゃ、腹くるしかねえな、ヒビキ？」

「ちょ！ヒビキさん！！」

日高ににじり寄られ驚くヒビキだった。

たちばなからの帰り道

「～これでヒビキも本音を出すだろ～」

いつものように帰るノーヴェだが・・・

「ストライクアーツ有段者・・・そして秘拳・・・赤心少林拳免許皆伝・・・ノーヴェ・ナカジマさんとお見受けします」

「！！」

突如声をかけられ自分の流派を言われた事に警戒するノーヴェ。

ノーヴェが振り返るとそこにはバイザーを付けた女性の姿が・・・

「貴方にいくつか伺いたい事と・・・確かめさせていただきたい事が・・・」

「質問するんらバイザー外して名を名乗れ」

ノーヴェの言葉に女性は・・・

「失礼しました」

バイザーを外した。

「カイザーアーツ正統ハイディ・E・S・イングヴァルト……『霸王』を名乗らせて頂いています」

「噂の通り魔か」

「否定はしません」

そう言つて立つていた外灯から降りてくる霸王。

「伺いたいのはあなたの知己である『王』達に付いてです……聖王オリヴェエのクローンと冥府の炎王イクスヴェリア」

霸王の言い方が気に入らないノーヴェエ。

「あなたはその両方の所在を知っていると「知らねえな」

霸王の言葉を否定するノーヴェエ。

「聖王のクローンだの冥王陛下だのなんて連中と知り合つた覚えはねえ……あたしが知ってんのは……一生懸命生きているだけの普通の子ども達だ！」

ノーヴェエの言葉に霸王は納得した。

「……理解できました……その件については他を当たるとします……ではもう一つ確かめたい事は」

「……」

「あなたの拳と私の拳・・・いったいどちらが強いのかです・・・
防護服と武装をお願いします」

「いらねえよ」

霸王の言葉に従わないノーヴェ。

「そうですか」

「よく見りゃまだガキじゃねえか・・・なんでこんな事してる？」

「強さを知りたいんです」

「ハッ！馬鹿馬鹿しい」

気だるそうに構えてみるノーヴェだが・・・

「!?!」

次の瞬間霸王を強襲しスタンショットを打ち込むノーヴェだが霸王は受け止めた。

（ガードの上からとはいえ不意打ちとスタンショットをマトモに受け切った・・・ち・・・言うだけの事はあるってか）

「ジェットエッジ」

武装と防護服を装着するノーヴェ。その姿を見た霸王は・・・

「ありがとうございます」

「強さを知りたいって正気かよ？」

「正気です・・・そして今よりもっと強くなりたい・・・あなたの赤心少林拳なら・・・いえ・・・仮面ライダースーパー1・・・沖一也の愛弟子のあなたなら試せる」

「ならこんな事しねえで真面目に練習するなりプロ格闘家目指すなりしろよ！！単なる喧嘩馬鹿ならここで止めとけ・・・ジムなり道場なりいい所紹介してやつからよ。何なら赤心寺の連中に紹介しても・・・」

「ご厚意痛み入ります・・・ですが私の確かめたい強さは・・・生きる意味は表舞台には無いんです」

「（構えた・・・この距離で？）そうかよ・・・悪いけど・・・喧嘩じゃ赤心少林拳は使わない・・・赤心少林拳は心身を鍛える相手と・・・使すべき時じゃないと使わない事にしてんだ」

霸王の構えを読取るうとするノーヴェだが・・・

「！！！」

霸王の凄まじいスピード懐を取られボディをいれられてしまうノーヴェ。

「がは！！！」

続いて凄まじい連打を浴びせられ弾き飛ばされてしまった。

口だけではなく霸王の实力は本物だ。

「列強の王達を全て倒し・・・ベルカの天地に覇を成す事・・・それが私の成すべき事なんです」

「寝惚けた事抜かしてんじゃねえよ！！昔の王様なんざ皆死んでる！生き残りや末裔達だって皆普通い生きてんだ！！」

ノーヴェの攻撃を受けながら霸王は・・・

「弱い王なら・・・この手でただ屠るまで」

その時ノーヴェの中の何かがキレた。

「この馬鹿つたれが！！」

凄まじいエネルギーをひねり出すノーヴェ。

「ベルカの戦乱も聖王戦争も！！ベルカって国そのものも！！もぅとっくに終わってるんだよ！！」

霸王を拘束しエアライナーで霸王の懐に飛び込んだ。

「リボルバースパイク！！」

ノーヴェの必殺の一撃が霸王に突き刺さるが霸王はノーヴェの足を掴み取った。

「終わっていないんです」

「!!」

カウンターバインドで羽交い絞めにされるノーヴェ。更に混乱していた。防御を捨ててまでこのバインドを仕掛けた事に・・・

「私にとっては・・・まだ何も・・・霸王・・・断空拳!!」

「うぐ!!」

ノーヴェに振り下ろされる霸王の拳。

凄まじい一撃がノーヴェを大地に沈めた。そしてノーヴェが倒れたのを見た霸王はそのまま背を向けた。

「弱さは罪です・・・弱い拳では・・・誰の事も護れないから」
「ちよつと待てよ」

ノーヴェがムクリと起き上がった事に驚く霸王。

(・・・まさか!!あれを受けて立てるはずが!!!!)

「あたしをマジにさせる良い技だったぜ」

ニヤリとするノーヴェに恐ろしさすら感じる霸王。

「・・・たく・・・しょうがねえな・・・一也・・・約束・・・
破るぜ」

首をゴキゴキ鳴らしたノーヴェはストライクアーツの構えを解いた。

「すう……」

そして呼吸を整え手で花を描くような構えを取った。その構えだけで威圧される霸王。

「見せてやるよ……赤心少林拳の冴え……」

秘拳・赤心少林拳の構えを取るノーヴェエ。

七之巻 赤心少林拳対カイザーアーツ（後書き）

ノーヴェ

「どついつ意味だよ一也・・・それって」

一也

「荒々しい戦いの中にも梅の花を美しむ心・・・それが赤心少林拳の極意」

ノーヴェ

「これが？」

一也

「こいノーヴェ・・・赤心少林拳梅花の型を授ける」

ヒビキ

「僕の弟子に・・・なってみますか？」

八之巻 見つけたたり梅花の型

八之巻 見つけたり梅花の型（前書き）

私！高町ヴィヴィオは！クラナガンに住む小学4年生！

ヒビキさんって言う鬼になって人助けする人に出逢って・・・

何かが変わりました！！

ヒビキさんへの弟子入りを拒絶され落ち込んでいた私・・・別の場所ではノーヴェが・・・そしてノーヴェが本気になりました！！

鬼・ヒビキ

夢・高町ヴィヴィオ

長・日高仁志

優・高町なのは

和・持田ひとみ

赤・ノーヴェ・ナカジマ

八之巻 見つけたり梅花の型

八之巻 見つけたり梅花の型

「すう……はあ……」

「はあ……はあ……」

ノーヴェの構えが変わった事に威圧され息苦しくなる霸王。ノーヴェの構えはまるで周囲の空気すら味方に付けるような威圧感を放っていた。

「はあああ!!」

威圧感に圧倒されながらノーヴェに拳を突き出す霸王だが……

「ふん!!はああ!!」

「ぐ!!」

流れるような動きで霸王の直線的な攻撃を受け流し、すかさずその流れを利用し霸王に一撃を入れるノーヴェ。

(なんなの? …あの動き …まるで自然 …)

「すう……」

再び呼吸を整えるノーヴェエは瞑想し始めた。

「赤心少林拳……合掌……」

「はああ!!!」

瞑想したノーヴェエを攻撃する霸王だが霸王の連打を流れるように避けるノーヴェエ。ノーヴェエに無駄な動きが一切なかった。

(これが……赤心少林拳……ドグマ……ジンドグマを倒した拳)

仮面ライダースーパー1・沖一也の拳ではないが歴戦の戦士と同じ拳法に圧倒される霸王。

「流石……沖一也の赤心少林拳……」

一也の赤心少林拳と言われたノーヴェエは反論した。

「勘違いするな……これは『あたしの』赤心少林拳だ」

「『あなた』の?」

「……ああ」

JS事件終結後、ノーヴェエは新しい家族に馴染めず放浪の旅をして

いた。そしてふと何処かの寺院に流れた。

「ここは？」

「「「せい！せい！！」「」

寺院では門下生たちが己を鍛え磨き上げていた。その拳法にノーヴェは見覚えがあった。

「あの拳法・・・まさか！！」

ノーヴェの身体に刻み込まれた記憶・・・それは仮面ライダースーパー1によって刻み込まれた拳法・赤心少林拳だった。

「もしかして・・・」

急ぎ寺院を散策するノーヴェ。

そして

広間に入ると其処に居たのは・・・

「せい！！せい！！！！」

赤心少林拳師範にして仮面ライダースーパー1・・・沖一也だった。

「あ・・・」

一也の拳法に見惚れるノーヴェ。

すると

「ん？・・・君は」

ノーヴェに気づいた一也。

「あ・・・その・・・」

一也に会ってタジタジになるノーヴェ。すると一也は・・・

「こんな山奥まで・・・遠い所よく来たな・・・」

「あ・・・いや・・・そういう訳じゃ・・・」

「なんだ？違うのか？てつきり入門するのと思ったぞ」

「え？」

一也の入門という言葉に驚くノーヴェ。

「もしかして・・・お前の拳法・・・教えてくれるのか!？」

「ああ、君にその気があればな」

一也の言葉にノーヴェは・・・

「・・・強くなりたい・・・あたしに教えてくれ!！」

一也から赤心少林拳を学ぶ決意をしたノーヴェ。

偶然訪れた寺院でかつての宿敵だった男に再会したノーヴェ。この偶然に感謝するのだった。

「せい!!せい!!!!」

胸元に『赤心少林拳』と刺繍された道着に身を包んだノーヴェ。一也から与えられた課題基礎の突きと蹴りの稽古をする。

その横では・・・

「てあ!!は!!!!」

ノーヴェに課題を渡しながらも己を鍛える一也。その一也の姿を見てノーヴェは思った。

「なあ・・・思ったんだけどさ・・・あんたもその機械の身体を鍛える必要あるのか?」

ノーヴェの言葉に一也は一旦手を休めてノーヴェに言った。

一也も自分達からすれば旧世代の改造人間である。改造人間は機械的なスペックが全てではないかと何処かで思っているノーヴェ。

だが一也の答えは・・・

「そんな事は無いぞ。人口筋肉も鍛えれば鍛えるほど強くしなやかになる・・・」

「・・・」

「へえ……」

あまりにも人間らしい一也の言葉に迷いを感じるノーヴェエ。だがノーヴェエはより早く強くなりたいそう思っていた。

「一也……お前こんな温い稽古じゃなくてももっとキツイの教えてくれよ」

「……」

獣のような目で一也を見るノーヴェエ。

そんなノーヴェエの目を見た一也はある決意をした。

「……ノーヴェエ……零下の中に身をおけ……それまでは稽古は付けん」

「それって……どういう意味だよ!? おい一也!」

ノーヴェエに何かの言葉を残し去っていく一也。

「……あいつ……一体」

一也の言葉に疑問を持つノーヴェエ。

その後

「は!?! はああ!?!」

赤心寺の広間で蠟燭の火に向かい拳を突き出すノーヴェ。

「!?!?!」

そしてひたすら山道をランニングし雨風に打たれ瞑想する日々が続いた。

「てえあ!!はああ!!」

ただひたすら・・・がむしゃらに身を鍛えるノーヴェ。

そして翌日の朝日が昇るとノーヴェは赤心寺の庭に出た。

「ん？」

庭にあった梅の花が咲いていたのに気づき、何気なく両手で包み込んだ。

「・・・え・・・まさか・・・」

咲いていた梅の花を美しいと思ったノーヴェ。心のあり方の変化に驚くノーヴェの元に一也が現れた。

「・・・見つけたな」

「一也・・・」

「ノーヴェ・・・赤心少林拳の心は・・・荒々しい戦いの中でも梅の花を美しく・・・それが極意だ」

「一也」

ノーヴェの目の前で構える一也。

「構える。今赤心少林拳梅花の型を授ける」

両手で花を描くような構えを取る一也。そしてノーヴェの目の前で型を披露するとノーヴェも一也のように構えた。

「！！てあ！！は！！」

梅花の型を刻み込むノーヴェだった。

そして赤心寺での修行を終え一也も宇宙ステーションに帰る時に約束した。

「ノーヴェ・・・赤心少林拳は喧嘩では使っちゃダメだぞ」

「え？なんで？」

「より自分を高めてくれる相手・・・そして使わなければいけない時じゃなければダメだ・・・そうすれば磨かれる・・・」

「そっか・・・わかったよ」

一也にそう約束しノーヴェは赤心寺を後にするのだった。

「すう……」

霸王に向かい両手で梅の花を描くノーヴェ……その姿を見た霸王は……

(……やられる!!)

構えだけで敗北を予想してしまうと技の体制に入った。

「出し惜しみはしない!霸王!断空拳!!!!」

ノーヴェに向かい拳を振り下ろす霸王だが……

「はあ!!りゃあ!!」

「ぐふ!!」

ノーヴェの両手で描いた花は霸王の拳を柔らかく包み込むように受け止め、そのまま霸王を押し出した。

「そんな!!」

剛が柔で制された瞬間だった。

「赤心少林拳……梅花……」

「はあ!!」

「ふん!!」

飛び掛ってくる霸王を受け流すように攻撃するノーヴェ。

霸王も驚いている自分の攻撃する力を逆に利用され、攻撃が受け流されてしまうからだ。

「!!」

パニックに陥る霸王の真上に飛ぶノーヴェは……

「いくぞ!! スーパーライダー!!」

空中に飛びながら赤心少林拳の型を決めるノーヴェは身体全体で巨大な梅の花を描いた。

「梅花二段蹴り!!!」

「ぐ!!」

ノーヴェのキックに吹き飛ばされた霸王と着地するノーヴェ。

「う・あ!!」

ノーヴェのキックに霸王は気を失ってしまった。

「た・く・く・約束破らせやがって……ん?」

突如霸王にかかった魔法が解け始めたそして姿を現したのは……

「……子供？」

一方

「うん」

ヒビキによって突如たちばなに呼び出されたヴィヴィオ。すると中からヒビキがヴィヴィオを向かえた。

「少女さん……いらっしやい」

「ヒビキさん」

正直バツが悪いヴィヴィオ。それはヒビキも一緒だ……するとヒビキは頭をかきながら言った。

「この間はあ言ったけどさ……」

「……はい」

「そんなに言うならなってみる？弟子？」

「……はい……え？弟子入り良いんですか!？」

「うん」

「いやっただあああああああああ！！」

ヒビキの言葉に喜んで飛び上がるヴィヴィオ。

八之巻 見つけたり梅花の型（後書き）

ヴィヴィオ

「鬼の弟子って何やるんですか？」

ヒビキ

「何やるんだらうね？」

霸王

「あなたも・・・古の王？」

畢

「・・・霸王のお姉ちゃん美味しそう・・・」

スバル

「て！食べる気なの！？」

畢

「・・・魔化魍・・・創世王ダークマター・・・またの名を仮面ライダーアース」

九之巻 鬼と創世王

九之巻 鬼と創世王（前書き）

お知らせ

過去篇で『聖王と七人の戦鬼』をやるに至ってオリジナルの鬼をあと4人募集します！

必要事項は

名前

性別

オリジナルであれば
音撃武器

技

簡単なプロフィール

オリジナルであれば
容姿

現代でそっくりな人（なのはキャラ、響鬼キャラに限り、ただし明日夢、あきら、トドロキ、日高、桐谷京介、ヴィヴィオ、ギンガは不可）

以上です。

お楽しみ要素を出したいのであて先はメッセージボックスへお願い

します。

私！高町ヴィヴィオは！クラナガンに住む小学四年生！

ヒビキさんって言う鬼に変わって人助けする人に出逢って・・・

何かが変わり始めました！！

ノーヴェとの戦いで保護された女の子・・・

そして！今日は私のヒビキさんの弟子としての初日です！！

鬼・ヒビキ

夢・高町ヴィヴィオ

長・日高仁志

優・高町なのは

和・持田ひとみ

王・畢・ナカジマ

九之巻 鬼と創世王

九之巻 鬼と創世王

「ん？」

何処かの部屋で目を覚ました霸王。

「よ」

「……………」

そこ横にはノーヴェと畢の姿が…………

ダイニングルームにて何やら話を始めた霸王とノーヴェ達。

「持ち物から調べさせてもらったわ……………」

・
ティアナが突き止めた霸王・アインハルトの身分を読み上げると……

「ジー……………」

話を聞かずにジーツとアインハルトの事を見つめる畢。

「あ！その子は私の娘の畢」

「その…………よろしく」

スバルに紹介され、バツが悪そうにアインハルトが畢に手を差し伸べた瞬間。

「はくはく」

「へ？」

アインハルトの手を噛む畢。

「わあああ！畢出しなさいって！！」

「ぶは！！」

「??????」

スバルに強引に離される畢。アインハルトは何が何だか分かっていない。

「ごめんね・・・この子物の認識が全部食べ物なんだ・・・」

「へ？」

J S事件後、スバルに引き取られた畢はスバルとの生活の中乏しい感情表現と味覚の素晴らしさを知った。

元々がスバルの細胞だったせいなのか光太郎の能天気な性格のせいなのか食欲が異常に特化し底なし胃袋と化し食べる事が大好きになったがそれは食物に留まらなく子供のように口に入れて物事を判断するようになったのだ。

「あたしは止めなさいって言ってんだけどね」

流石に止め役になっているティアナ。

「まるでお母さんですね」

「どうだか・・・」

アインハルトにそう言って両手を組んで考えるティアナだが・・・

「そこまで小うるさいとお母さんじゃなくて姑だよね」

「そう言う事言うつのはこの口か！？この口か！？」

「ひゃふひゃふはふいうー！」

悪口を言ってティアナに頬つぺた引つ張られる畢だった。

すると何かを思い出した畢。

「お母さん・・・私出かけてくる」

「ん？何処行くの？」

「ヴィヴィオ姉ちゃんがたちばなに着てって言った」

「あんまり食べないようにね」

そう言ってアインハルトのこと任せスバルに見送られる畢だった。

たちばなにて・・・

「いらっしやいませ」

たちばなの制服に身を包んで接客しているヴィヴィオ。ヒビキの弟子になったことにより猛士の一員として迎えられた。

何故こんな事をやっているかというと・・・

1時間前

「ところでヒビキさん！鬼の修行って何やるんですか!？」

ウキウキ気分で尋ねてみるヴィヴィオだが当のヒビキは・・・

「・・・何やるんだろう?」

鬼の弟子育成方法が分かっていなかった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

そんなヒビキを見て無言になるヴィヴィオ。見かねた日高がヴィヴィオにたちばなの従業員をする事を勧めた。

そして現在

「あー!」

慌てて皿を回収するヴィヴィオだが勢い余って皿を割ってしまった。

それを見た日高は・・・

「よおヴィヴィ王くちょっと奥に来てもらえるか？」

「!?!」

温厚な日高に怒られると思ったヴィヴィオ。

奥の部屋に入ったヴィヴィオは何やら書物のようなものが積まれた部屋に入った。

「おうヴィヴィ王！ここが猛士の司令室つて所だな。まあ色々あつから俺達は此処に籠る事もある。話はそれだけ」

「へ？お説教じゃないんですか？」

「ん？どうして？」

「あの・・・私・・・お皿割っちゃったし・・・」

ヴィヴィオの言葉を聞いた日高は・・・

「ああ・・・んなもんバイト代から差っ引いとくから良いんだよ」

「はあ・・・て！バイト代貰えるんですか!?!」

何か軽いおじさんの日高に調子が狂ってしまうのだった。

その一方

「うん」

何やらノートのような物を出して考え込んでいるヒビキ。

「相当煮詰ってるみたいだね・・・」

ひとみがお茶を出しながらヒビキに言う。

「おやつさんに教えてもらった事やればいいじゃない」

そう提案するひとみだが・・・

「いや・・・僕はおやつさんのメニューは結局途中で投げちゃったし・・・それに・・・僕は僕なりの独学で鬼になっちゃったし・・・」

「あゝ自分にはそのやり方は合ったけど、それがヴィヴィオちゃんに合うかどうか分からないからどうしようって思ってるでしょ」

「うん・・・まあ・・・」

「・・・桐谷君の事まだ引き摺ってるんだ・・・まあ良いじゃないの・・・トドロキさんも言ってたけどヒビキ君はヒビキ君流のやり方で良いんじゃないの?」

「うん」

ひとみの言葉に更に考え込むヒビキだった。

とりあえず頭でつかちな話になるがヴィヴィオに猛士とは何かを知ってもらう事にするのだった。

その時

「ヒビキさん！魔化魍です！！」

いきなりヒビキの部屋に入ってきたヴィヴィオ。その言葉に急いで準備しヴィヴィオと共に車に乗ろうとすると・・・

「あれ？ヴィヴィオ姉ちゃん？」

たちはなに入ろうとした畢。それを見たヴィヴィオは・・・

「ヒツちゃん！！乗って！！」

「へ？」

いきなりのフリに着いて行けず車に乗った畢はヒビキ達と共に魔化魍退治に向かうのだった。

現地に到着したヒビキ達は早速キャンプの準備を始めた。

「うわ・・・アウトドアって大変だな」

テントを張っているヴィヴィオ、何故か今回は重労働を押し付けら

れた。

「ボヤかないの。これも修行です」

「はい」

そう言ってヒビキと一緒にテントを張るヴィヴィオだった。

その一方

グツグツグツ

「じゅるるるるる」

涎たらしながらカレー作ってる畢とひとみ。

「ヒッチャン食べちゃダメだからね」

「コクコク」

ひとみの言葉にとりあえず頷く畢だった。

「それじゃあ・・・鷹を放ったらカレーでも食べようか？」

「はい！」

こうしてアカネタカを放ち食事をとるヒビキ達だった。

「ヒッチャンカレー美味しいね」

「ホント〜」

ヴィヴィオとひとみは畢の作ったカレーを食べて喜んでいた。

「・・・だつてこのカレーお父さん仕込だもん」

「畢ちゃんのお父さんってどんな人？」

その言葉に畢は・・・

「どっか抜けてる人」

「ふうん」

畢の言葉に納得するヒビキ。すると一羽の鷹がヒビキの元に舞い降りた。

「当たり前だ！行ってきます！！」

そう言つてカレーをかき込み出勤するヒビキと見送るヴィヴィオ達。

そして

「ヒツちゃん行こう！」

「??？」

「あ！ちよつとヴィヴィオちゃん！」

畢を引きつれ森に入つてくヴィヴィオだった。

森の奥で・・・

『あら？鬼さんじゃありませんか？』

「・・・・・・・・」

同時と対峙するヒビキは音角を取り出し・・・

・・・・・・・・キーン・・・・・・・・

静かな響きが鳴り響くと同時に向かって走りながら額に掲げ、紫の炎に包まれるヒビキ。

「はぁぁぁ・・・・・・・・はぁー!!」

鬼に姿を変える響鬼。

「!!!」

童子に殴りかかる響鬼だが童子は響鬼の拳を避けながら異型の姿を現した。

「はぁー!!」

『ジュウー!!』

音撃棒を構え童子を殴り飛ばす響鬼はそのまま烈火剣を構え童子を切り裂いた。

「ふう・・・童子は倒した・・・けど姫は・・・ん？」

再び鷹が響鬼の元に舞い降り・・・

「マズイ！」

記憶を読取った響鬼は急ぎヴィヴィオ達の元へ向かった。

その頃

少しでもヒビキの役に立ちたいが為に畢と森を探索しているヴィヴィオ。

「ヴィヴィオ姉ちゃんは今後は魔導師じゃなくて鬼になりたいの？」

畢の質問にヴィヴィオは・・・

（ああ・・・やっぱり子供ってママと同じ仕事かしたいのかな・・・）

そう思いヴィヴィオは畢に聞いてみた。

「そういえば・・・ヒツちゃん将来何になりたいの？」

ヴィヴィオの言葉に畢は応えた。

「・・・カレー屋さん」

「へ？なんで！？レスキューじゃないの？」

てつきりレスキュー志望だと思ったヴィヴィオだが畢は。

「・・・だってカレー屋さんの方が美味しいもん」

将来の夢すら食欲で決めてしまった畢だった。

「それにお父さんの御飯でカレーが美味しかったから」

「あ！なるほど・・・」

そう感じながら森を詮索していると・・・

「ん？」

何かの触手に身体を絡めとられる畢とそこに現れる姫。しかし動揺した様子の無い畢。

「あ」

そのままあっさりと姫にさらわれる畢。

「少女さん！・・・」

ヴィヴィオ達の元に駆けつけた響鬼。

「あー！ヒビキさん！！」

「畢ちゃんは！？」

「姫に」

「いそがないと！」

急いで畢を助けに行こうとする響鬼だが・・・

「あ！大丈夫です」

「へ？」

ヴィヴィオの全然心配していない様子に驚く響鬼。

「だってヒツちゃんあれ位だったら自分で何とかするから」

「へ？」

ヴィヴィオの言葉に目を丸くする響鬼。

そしてヴィヴィオは・・・

（ヒツちゃんは畢ちゃんて私は少女さんなんだ・・・）

等とってしまった。

「……………」

まるで脅えた様子の無い畢は森の奥に連れ去られてしまった。

「ふふふ……」

すると姫は畢を舐めるような視線で見た。

「創世王の肉か……良い滋養になる極上の肉だな……私も味見させてもらおう」

そう言っつて畢に噛み付こうとする姫だが……

「ガブリ」

「しゃああああ!!」

逆に畢の方が姫に噛み付いた。かつて人間に食われそうになった姫を見た事があるか？

あまりの顎の力に姫は畢を乱暴に弾き飛ばした。

畢の反応は……

「おえええ……マズイ……」

よっぼど姫が不味かったのか吐きそうなる仕草を見せると変身魔法を解き本来のサイズになった。

姫と対峙する畢・・・

「・・・お前・・・美味しくない・・・美味しくない奴は・・・悪い奴!!!」

やはり畢は相手の善悪を味覚で判断するようだ。

「!!!」

両拳を捻りこむ畢は光太郎と左右逆の変身ポーズをとった。

「・・・変・・・身!!!」

畢の腰にベルトが現れると凄まじいエネルギーが放出され畢の体が変わった。

光沢のある赤い身体に緑の目・・・

「・・・仮面ライダー・・・アース!!!」

変身を完了した畢は姫に構えた。

「創世王ダークマター・・・今の名は・・・仮面ライダーアース」

スカリエッティにより造られた初のミッドチルダ製仮面ライダー・・・創世王ダークマター・・・しかし元々悪の仮面ライダーではなかった為スバルにより光太郎の生まれた星が地球だからという理由で『アース』という名前をもらった。

『!!!』

姫を蹴り飛ばす畢。光太郎のファイティングスタイルの為か手は繋ぎで蹴りで決めるような戦法をとる畢。

以前のような力任せの戦い方ではなかった。

「ふん!!!」

『シャアアアア!!!』

畢に蹴り飛ばされる姫。そしてベルトにエネルギーをチャージする畢は姫に向かって飛び掛った。

「とあ!!!アースキック!!!!」

『グサアアアアアアアアアアアア!!!』

アースキックのクリーンヒットを浴びた姫は炎に包まれ爆発した。

「畢ちゃん!へ?」

姫がやられた時駆けつける響鬼だが畢の姿に驚いた。

「?ヒビキさん・・・なんか来るよ?」

畢の触覚が何かを捕らえると現れたのはヤマビコだった。

「よし!!!はあ!!!」

響鬼はそのままヤマビコに飛び掛ると音撃鼓をヤマビコに装着した。

ヨオ！！

スイッチを押すと巨大な太鼓が描かれた。

『！！！！』

ヤマビコは響鬼を振り払おうとすると足を畢に押さえつけられてしまった。

「豪火連舞の型！！」

ダンダンダンダン！！！！

響鬼が清めの音を叩き込み苦しみもがくと……

「はぁ……はぁ！！」

響鬼の清めの音に爆発するヤマビコだった。

そしてたちはなに戻ると……

「畢~~~~~！！！！」

泣きながら畢に詰め寄るスバル。

「だって……悪い奴だったんだもん……」

「だからって玩具じゃないんだから変身しちゃダメでしょ!!ガミガミガミガミ!!!」

珍しく説教しているスバル。

それを見たヴィヴィオは・・・

（ああ・・・スバルさんって自分の子には厳しいタイプなんだ・・・）

等と思った。

「で〜ヴィヴィ王〜は何で畢ちゃんを巻き込んだのかな〜」

「ひー!日高さん!」

笑顔の日高にタジタジになるヴィヴィオ。因みに動向を見守っていたヒビキは万歳してお手上げを披露していた。

「それじゃ・・・ちょっとお話しよつか?」

「・・・はい」

この後ヴィヴィオの給与査定がお楽しみになったのは言うまでもない。

九之巻 鬼と創世王（後書き）

柳雨さんが考えてくださった鬼です。

古代ベルカ篇予告

オリヴィエ

「あれ？ギンガさん何やってるんですか？」

ユラメキ

「誰ギンガって私はユラメキ・・・海を制する鬼・・・水の技なら私の右に出るものはいない！！！」

オリヴィエ

「あ！そういえばリボンの色が違う！！！」

ユラメキ

「は！！！」

オリヴィエ

「いや、その顔はどう見てもギンガさんだ」

ユラメキ

「あ！そうそう私はギンガ・ナカジマ！妹と姪っ子に手を焼いてます！て！違っつて！！！」

アインハルト

「あの子が……聖王？」

ヴィヴィオ

「あの子一体？」

ヒビキ

「少女さんはどうしたいの？」

ヴィヴィオ

「私は……」

十之卷 聖王と霸王

十之卷 聖王と霸王（前書き）

お知らせ改

過去篇で『聖王と七人の戦鬼』をやるに至ってオリジナルの鬼をあと3人募集します！

必要事項は

名前

性別

オリジナルであれば
音撃武器

技

簡単なプロフィール

オリジナルであれば
容姿

現代でそっくりな人（なのはキャラ、響鬼キャラに限り、ただし明日夢、あきら、トドロキ、日高、桐谷京介、ヴィヴィオ、ギンガ、スカリエツティは不可）

以上です。

【あて先はメッセージボックス】までお願いします。【感想】等に

来られた方は無効票にします。

私！高町ヴィヴィオは！クラナガンに住む小学4年生！

ヒビキさんっていう鬼に変わって人助けする人に出逢って・・・

何かが変わり始めました！！

今日はノーヴェがベルカ古流武術の子を紹介してくれるみたいですよ！

そしてここから私とヒビキさんの関係が昨日今日の関係じゃない事がわかるのでした・・・

鬼・ヒビキ

夢・高町ヴィヴィオ

長・日高仁志

優・高町なのは

和・持田ひとみ

王・畢・ナカジマ

赤・ノーヴェ・ナカジマ

覇・アインハルト・ストラトス

十之卷 聖王と霸王

十之卷 聖王と霸王

たちばな

「出た！私のバイト代！！」

たちばなからの給料袋を持って喜ぶヴィヴィオ。早速中身を確認すると……

チャリン……

出てきたのは日本円にして300円……描写は100円玉が三枚寂しく落ちたところを想像していただきたい。

「え！？こんなに少ないんですか！？」

前のバイト代に比べて激しく少ないヴィヴィオの給料に日高は……

「ヴィヴィオこの間皿割った分で差っ引いたのとヒツちゃんを危ない目に合わせた減法で……その辺に関しちゃちゃんとケジメつけねえとな」

「うう……大人の世界って厳しい……宇宙刑事ギャバンだって3千円だったのに……」

半ば泣きべそかきながら給料を財布にしまうヴィヴィオだった。

その時

ヴィヴィオの携帯の着メロが鳴り電話に出るヴィヴィオ。

「あ！ノーヴェ？うん！今たちはな！え？これから分かった！！」

「ん？どうしたの少女さん？」

「ノーヴェが格闘技やってる子を紹介してくれるんだって！それで・
・その……」

「まさか……僕も一緒に？」

「はい！！」

ヴィヴィオのお願い&日高のノリノリ発言に行かざるを得なくなっ
たヒビキだった。

途中でリオとコロナと合流しノーヴェ達が待つ喫茶店に向かった。

「ノーヴェ！みんなー！！！」

そう言ってスバルとティアナもいる事に驚きながら席に座るヴィヴ
イオ。

そして

「はぐはぐ……」

「失礼します」

別のテーブルでひたすら食べている畢の隣に座るヒビキ。

ぶっちゃけ女性ばかりなので少々居辛いので子守ということとで畢の相手をする事にした。

（はぁ・・・ヒビキさんならもっと上手く立ち回るのにな・・・）

己の適合性に少し未熟さを感じるヒビキだった。

ヴィヴィオは楽しそうにノーヴェに武術の子の事を聞いていた。

「何歳くらいの子？流派は？」

「お前の学校の中等部の一年生・・・流派はまあ・・・旧ベルカ式の古流武術だな」

等と会話が進むと・・・

「失礼します」

突然声が響き一同が振り返ると・・・

「ノーヴェさん・・・みなさん、アインハルト・ストラトス参りました」

席に着こうとするアインハルト。

「遅れました・・・少し道に迷ってしまっ・・・」

「良いつて気にすんな」

「いえ・・・ある方に送ってきてもらったんです」

アインハルトの言葉にスバルが・・・

「ダメだよ知らない人に付いて行っちゃってどんな人？」

「黒いグローブつけてて青いブルゾンの・・・」

そのキーワードにスバルは・・・

「ねえ・・・その人・・・ガサツで人のよさそうな顔してた？」

その言葉にアインハルトは・・・

「しました」

「じゃあ・・・無害だから良いか・・・よってけば良いのに」

等と思うスバルだった。

畢は・・・

「ん？・・・懐かしい匂いが・・・まっ・・・いつか・・・すみませ
ーんサンドイツチ追加で」

「畢ちゃんまだ食べるの？」

ヒビキに胃袋の心配をされる畢だが・・・

「・・・私にとって1年分は1食分だもん」

「アホか!」

等とティアナに『なんでやねん』と書かれたスリッパで頭はたかれる畢だった。

「どっから持ってきたのこのスリッパ？」

「前に探偵事務所の所長やってる女の人に貰ったの」

そう言ってスリッパをしまっティアナだった。

話が戻り・・・

「ミッド式のストライクアーツと『猛士流格闘術』をやってます！
高町ヴィヴィオです！」

「（猛士流格闘術？）・・・ベルカ流古流武術アインハルト・ストラトスです」

ヴィヴィオと握手するアインハルトだが・・・

（小さな手・・・脆そうな身体）

だがその瞳はアインハルトの記憶に焼きついた聖王の証でもある。

「あの？・・・アインハルトさん？」

「あ！いえ！！」

ヴィヴィオに心配されて迷いを振り払うアインハルトと・・・

「あ！紹介します！私の師匠のヒビキさんです！！」

（ヒビキ！？）

その言葉に驚愕するアインハルト。そしてヴィヴィオにつれてこられるヒビキ。

「どうも・・・ヒビキですッシユ！」

「！！」

ヒビキの姿を見て驚愕するアインハルト。

（・・・何故ヒビキが・・・まさか・・・輪廻を越えて再会したっていうの？）

アインハルトの脳裏に浮かぶのは聖王オリヴィエともう一人の鬼の姿だった。

「ん？僕の顔に何か付いてますか？」

「あ・・・いえ・・・」

ヒビキに見られてタジタジになってしまおうアインハルト。

アインハルトに会ったのはヒビキに対する嫉妬と尊敬だった。

格闘コートに移動しヴィヴィオとの組み手の準備の最中ノーヴェに言った言葉を思い出すアインハルト。

「私の記憶に居る彼の悲願なんです・・・天地に覇を持って和を成せるそんな王であること・・・弱かったせいで・・・強くなかったせいで彼は彼女を救えなかった・・・守れなかったから・・・そんな数百年分の後悔が私の中にあるんですただけどこの世界にはぶつける相手がもう居ない救うべき相手も守るべき国も世界も」

拳を握り締めるアインハルト。

「・・・けど・・・あの人は救った・・・あの人は守った・・・あの人は強かった・・・オリヴィエのそばにずっと居た・・・あの鬼は」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

格闘コートの端で見物しているヒビキを意識してしまうアインハルト。

「メダイ・・・・・・・・」

合図が開始されヴィヴィオの拳を受け止めるアインハルト。

(・・・まっすぐな拳・・・まっすぐな技・・・)

ヴィヴィオのまっすぐな心に自分との違いを感じ取るアインハルト。

それを見ていたヒビキは・・・

「・・・どうしたんだろう？あの子・・・」

「うん・・・なんかガチガチ」

戦いの経験の豊富なヒビキと戦うための勘が鋭い畢はアインハルトの動きに何かを感じていた。

(凄い！)

アインハルトに凄みを感じるヴィヴィオ。

「!?!」

アインハルトの掌低でヴィヴィオが吹き飛ばすと後ろを向いてしまうアインハルト。

(・・・彼女は・・・私とは違う・・・それに彼も・・・)

その時

「ちよっと待った・・・」

「ん？」

「ヒビキさん？」

ヴィヴィオとアインハルトの間に割ってはいるヒビキ。

「どうしたのかな？少女さんの動きはそれほど悪くなかったと思うけど……」

「いえ……そうではなくて……遊びと趣味の範囲では十分すぎるほどに……」

その言葉に考えるヒビキ。

(彼女は……何を焦っているんだ？)

「すみません……今日は此処で……」

「またやるんでしょう？」

「え？」

ヒビキにそう言われアインハルトは考え込むと……

「わかりました……」

了承するのだった。

夜中

ヴィヴィオに呼び出されたヒビキ。何やらヴィヴィオの顔は真剣だった。

「もしかして……今日のこと気にしてるの？」

「はい……ヒビキさん……私が弱いから……鍛えたりないから……アインハルトさんをガツカリさせちゃったんです」

ヴィヴィオの深刻な表情にヒビキは優しい笑みを向けた。

「少女さん……鍛えたり無かったら……鍛えるまでだよ」

「ヒビキさん……はい!!お願いします!!」

「え?今から!?!」

「はい!膳は急げです!!」

こうして一晩中ヴィヴィオの特訓に付き合わされたヒビキだった。

十之卷 聖王と霸王（後書き）

左近さんが考えてくださった鬼です。

蕎麦屋の光さんの店

光さん

「はい。天蕎麦お待ち」

ヒナキ

「ありがとう〜ん〜美味しい〜」

オリヴィエ

「ヒナキさん考古学者なんですよね？」

ヒナキ

「ええそうよ！そして私の戦い方は蝶の様に舞！蜂の様に刺す！！」

雛鬼！！

ヒナキ

「……ところで光さんは黒い人に変身しないの？」

光さん

「いや〜今回僕はエキストラという事で」

ヒナキ

「ふうん・・・お嫁さんと娘さんの食費稼ぐの大変なんだ」

ガク

光さん

「ヒナキさん・・・なんでそんな鋭い所突くかな」

オリヴィエ

「うわー鋭い所もミツキさんそっくり・・・」

古代ベルカ王国宝剣を巡る数々の戦い

古代ベルカ時代に聖王と共に戦った男・・・その男の名も響鬼！！

『過去編 聖王と七人の戦鬼』

ヴィヴィオ

「・・・今度は本気で・・・」

アインハルト

「この人と戦ってみたい・・・」

ヒビキ

「こんな時に魔化魍が・・・」

ヴィヴィオ

「アインハルトさん……まさか」

アインハルト

「私の力が……鬼に届くか……」

十一之巻 響く鬼対霸王

十一之巻 響く鬼対霸王（前書き）

私！高町ヴィヴィオはクラナガンに住む小学4年生！

ヒビキさんって言う鬼に変わって人助けする人に出逢って・・・

何かが変わってきました！！

今日はアインハルトさんとの再戦！徹底的にヒビキさんと一緒鍛えて・・・アインハルトさんに伝えてみせます！！

鬼・ヒビキ

夢・高町ヴィヴィオ

長・日高仁志

優・高町なのは

和・持田ひとみ

赤・ノーヴェ・ナカジマ

覇・アインハルト・ストラトス

十一之巻 響く鬼対霸王

高町家

「ヴィヴィオが帰ってこない!!」

ヴィヴィオが夜遅く出かけてしまった事に絶叫するのは。

「大丈夫だよ……どうせヒビキさんのところでしょう」

「ユーノ君！ヴィヴィオが心配じゃないの!？」

なのはの言葉にユーノは……

「まあ……可愛い子には旅をさせろって言うし」

その言葉になのはは……

「へえ……ユーノ君そんな事言うんだ……幻滅だな」

「なのは……まさか……」

嫌な予感がしたユーノ。

「にゃ〜お〜……」

「!」 猫嫌いのスクライア司書長

なのはの猫の鳴き真似にギョツとする。

「ヴィヴィオを探してきてくれないとこの家を猫だらけにしちゃうよ」

「うわああああああああん!」

なのはの誠心誠意を籠めた『お願い』という名の脅迫に泣きながらヴィヴィオを探しに行くユーノだった。

十一之巻 響く鬼対霸王

翌日

ヒビキとの特訓の最中泣きながらヴィヴィオを探していたユーノを見つけたヴィヴィオは全てを察し素直に家に帰りアインハルトとの戦いに備えるのだった。

（はぁ・・・ママったらまたパパを脅迫したんだな・・・それにしてもヒビキさんにあれだけ鍛えてもらったんだもん!今度こそ!）
そう思いをさせながらヴィヴィオはアインハルトの待つ場所まで向かうのだった。

全員が集まり競技場でヴィヴィオは柔軟体操を取っている。その姿をアインハルトはじっと見ていた。

(何故こんなに張り切るの？師匠が組んでくれた試合だから？)

本日はヒビキとイブキがヴィヴィオの保護者として傍観している。どうしてもヒビキが気になってしまっアインハルト。

(・・・ヒビキ・・・聖王を支え・・・聖王の心のより所になった鬼・・・聖王の最も信頼していた男・・・霸王は・・・彼に嫉妬する反面懂れていた・・・彼の目の前で無様な戦いを見せられない)

ヒビキに見られているという事で緊張するアインハルト。だがそれはヴィヴィオも同じだった。

「いくよ！！クリス！！」

「！！」

大人モードになったヴィヴィオとアインハルト。だがアインハルトはヴィヴィオではなく傍観しているヒビキを見ていた。

(・・・彼は違う人・・・けど彼の記憶に焼きついたヒビキと姿も・・・名前も同じ・・・この人と戦ってみたい)

ヒビキとの戦いに思いをはせるアインハルト。

(・・・この人・・・ヒビキさんを見てる)

ヴィヴィオも無意識のうちにアインハルトが自分よりヒビキを見ている事に考え込んだ。

そしてそれを見ているヒビキ。

「ヒビキ君……どうしたんですか？」

「いや……イブキさん……何かあの子は少女さんを見ていない気がして」

「奇遇ですね……私もそう思いました」

アインハルトに底知れない劣等感を感じるヒビキとイブキ。

そしてノーヴェが合図した。

「レディ……ゴー!!!」

「はああああああああああ!!!」

先に手を出したのはヴィヴィオだった。

「!?!」

ヴィヴィオの真っ直ぐで鋭い突きに翻弄されるアインハルト。

(何?……昨日とまるで動きが違う……)

ヴィヴィオの突きに翻弄するアインハルト。

(・・・私は・・・アインハルトさんに全部ぶつける!!昨日ヒビキさんとあんなに練習したんだもん!!)

昨晚のヒビキとの特訓を教訓にアインハルトに打ち込むヴィヴィオ。

(く!!)

ヴィヴィオの攻撃を受けきれなくなったアインハルトは後ろに跳躍した。

「・・・強い・・・」

昨日の今日でヴィヴィオがここまで強くなっている事に驚くアインハルト。

「なら!!」

早期決着を試みた。

「はああああああ!!」

「霸王!断空拳!!」

「う!!」

突進してくるヴィヴィオにカウンターで決め技を捻じ込むアインハルト。だが・・・

「うおおおおおおお!!」

ヴィヴィオは踏みとどまりアインハルトの顔面に拳を入れた。

「うー!!」

ヴィヴィオに吹っ飛ばされ混乱するアインハルト。

(・・・そんな・・・私の拳は・・・軽くない・・・なのに・・・何故?・・・あの人の教えのおかげ?)

ヴィヴィオのタフさに驚愕するアインハルト。そしてヴィヴィオがヒビキのように構えた。

「はああ・・・烈火拳!!」

炎をまとった拳でアインハルトを殴るヴィヴィオ。

それをじっと見ていたヒビキは・・・

「今の少女さんは五分五分ってところかな・・・」

ヴィヴィオとアインハルトの戦いを鋭く見ているヒビキ。

その時だった。

「ヒビキ君・・・魔化魍が」

「え?・・・はい・・・スバルさん僕はここで」

「わかりました」

スバルたちに事情を話し魔化魍が出た場所まで向かおうとするヒビキとイブキその時だった。

「!!!」

「!!!」

突如競技場に現れる魔化魍。

「そんな・・・何故魔化魍が？」

都会に現れることに疑問を感じるイブキ。今の状況でスバルたちは競技場に居る人たちの非難を優先させ魔化魍の相手をヒビキとイブキに任せようとする。

その時

「・・・・・・・・」

アインハルトが魔化魍の前に立った。

「・・・・・・・・アインハルトさん・・・・・・・・まさか・・・・・・・・」

ヴィヴィオは嫌な予感がすると突然現れた魔化魍に向かって走るアインハルト。

(魔化魍を倒せば・・・・・・・・彼は・・・・・・・・)

かつて魔化魍に敗北してしまった霸王の願いを叶えるべく魔化魍に

向かって走るアインハルト。

「こつち!!」

アインハルトが魔化魍を押さえ込み屋外に出すと魔化魍に向かって構えた。

「霸王・・・断空拳!!」

アインハルトは一人の力で魔化魍を倒そうとするが必殺の拳を弾かれてしまった。

「う!!」

地面に叩き付けられるアインハルト。凄まじい衝撃を浴びたせいか動くことができない。そして魔化魍はジリジリと詰め寄ってくる。アインハルトに向かって一撃をお見舞いした。

「アインハルトさん!!」

「!!」

ヴィヴィオがアインハルトの下へ駆けつけアインハルトへの攻撃を防ぐが・・・

「うわああ!!」

ヴィヴィオも吹き飛ばされ変身魔法が解除されてしまった。

「う!!」

絶体絶命のヴィヴィオとアインハルトその時・・・

「「!!」」

爆音が響き一台のバイクがヴィヴィオと魔化魍の間に入った。

「少女さん!!」

すれ違い様にバイクの後部座席からヴィヴィオを片手で持ち上げて回収するヒビキとバイクを運転しながらアインハルトを片手で持ち上げて回収するイブキ。

「「おお!!?」」

ヒビキ達はヴィヴィオとアインハルトを安全な場所まで下ろすとバイクから降り音角と音笛を構えた。

・・・キーン・・・

・・・ヒュルリリリ・・・

静かな響きと息吹きが周囲を包み込みヒビキは音角を、イブキは音笛を額に掲げると鬼の紋章が浮かび上がり・・・

「はあああ・・・」

「・・・」

呻きとともに発火するヒビキと風に身を包むイブキ。

そして

「……はああああ!!」

炎を吹き飛ばし覚醒する響鬼。

「はっ!!」

風を切り裂き覚醒する威吹鬼。

「威吹鬼さん! 援護お願いします!!」

「はい!」

音撃棒を構え突撃する響鬼と響鬼への攻撃を音撃管で阻止しながら援護する威吹鬼。

ガガガガガガ!!

威吹鬼の音撃管で怯む魔化魍。そして響鬼が魔化魍に向かって飛び掛り音撃棒で殴りつけた。

『ギヤアアアアアア!!』

目をやられた為暴れまわる魔化魍。すると威吹鬼が音撃管を切り替え鬼石を魔化魍に向かって撃ち込んだ。

「はあ!!」

「オオ！！」

響鬼も音撃鼓を魔化魍にねじ込みスイッチを押すと巨大な太鼓が描き出された。

「音撃射！疾風一閃！！」

「音撃打！火炎連打！！」

PUUUUUUUUUUU！！

ダンダンダンダン！！

響鬼と威吹鬼の音撃が同時に魔化魍を包み込み魔化魍がうめき声を上げる。

PU！！

「はぁ・・・はぁ！！」

ダダン！！

響鬼と威吹鬼の音撃の止めを浴び爆発する魔化魍。

魔化魍を撃破すると舞い降りる響鬼。そして響鬼と威吹鬼は顔の変身を解いた。

「ふう・・・」

「どうして・・・こんな街中に魔化魍が？」

一息入れるヒビキと魔化魍の出現に疑問を抱くイブキ。

そしてヒビキ達の姿を目に焼け付けたヴィヴィオとアインハルトは・
・

(・・・私も・・・いつかヒビキさんと肩を並べて戦いたい)

(・・・これが・・・聖王と共に戦った・・・鬼?)

それぞれの気持ちを胸に秘めるのだった。

たちはな

「「「「わいわいがやがや!!!」「「「「」

魔化魍の出現でうやむやになったヴィヴィオとアインハルトの試合。
その残念会として、たちはなで団子を食べているスバル達。

「そういえば思ったんだけどさ」

「ん?なに?」

「【私たち】って浮いた話無いよね」

ティアナとノーヴェに反物質爆弾発言をするスバル。

チャキン クロスミラージュをスバルの頭に突きつける音

「・・・あなたにだけは言われたくなかったわ・・・いつぺん死ぬ？」

「ちよ！ティアー！！金髪のお坊さんみたいなことになってるよ！！」

瞳孔開きながらスバルのドタマにクロスミラージュを突きつけるティアナ。

「ティティアさん！？私だって浮いた話無いよ！！」

「じゃこれは？」

スバルの目の前に摘み上げられる畢。

「アンタは無くて有るようなもんでしょ」

「だから！光太郎さんは旦那様でもなければ恋人でもないって！！」

必死に弁明しようとするスバル。一方ノーヴェはがっくりと沈んでいた。

それを見ていた畢は・・・

「お母さん口は災いの元だよ」

「おゝヒツちゃん良くそんな難しいこと知ってるね」

日高に頭を撫でられ照れる畢。

そんなスバル達を放っておきヴィヴィオ達はヴィヴィオ達で盛り上がっていた。

「先日は・・・失礼なことを言っつてしまい申し訳ありませんでした」
ヴィヴィオに頭を下げるアインハルト。

「そんな！アインハルトさん！別に・・・」

「いえ・・・あの時あなたは身を投げてまで私を守ってくれました・・・趣味や遊びではあんな事できません」

「そ！それは・・・ヒビキさんが教えてくれたから・・・」

ヒビキをチラッと見るヴィヴィオにヒビキは・・・

「いや僕は大した事してませんよ！！」

「謙遜する必要はないと思いますけど」

アインハルトの言葉を聴き最近の子供は大人びたと感じるヒビキだった。

その時

「よーヴィヴィ王」

「ギクリー！」

嫌な予感全力全開で日高に詰め寄られるヴィヴィオ。

「ヴィヴィ王？今日はか〜なり〜無茶したんだって〜？」

「ひー！おやつさん！〜！」

本日の出来事を日高に指摘されギョツとするヴィヴィオ。

「いかな〜鬼になるなら身体は大切にしないと〜」

「お・おやつさん・・・まさか・・・」

「ヴィヴィ王！今月の給与査定を楽しみにしようぜ〜」

「ガーン！〜！」

『はははははは！〜！〜！』

ヴィヴィオの反応に笑い声がたちばな中に響いた。

こうしてヴィヴィ王・・・もといヴィヴィオの給与査定が地の底まで下げられた事は黙っておこう・・・

十一之巻 響く鬼対霸王（後書き）

蕎麦屋の光さんの店

オリヴィエ

「あ！エリオさ〜ん」

デンキ

「え？誰エリオって？・・・僕はデンキ雷の鬼だよ」

光さんの嫁

「いや〜どう見てもエリオじゃん」

デンキ

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

無言で雷を放ちながら威圧するデンキ

電鬼

オリヴィエ

「口数少ないですね？」

光さんの嫁

「う〜ん無口なのか〜」

オリヴィエ

「ところで光さんのお嫁さんはどうなるんですか？」

光さんの嫁

「いや、私の場合そっくりキャラがこない場合このままで出演だつて」

デンキ

「……僕を置いていかないでください……」

そう言つてオリヴィエと光さんの嫁にハリセン使うデンキ。

トドロキ

「トドロキさん！退院おめでとつ！ございます」

トドロキ

「ありがとつす！！自分も今日から前線復帰つす！！」

ヴィヴィオ

「……え？この人が弦の鬼ですか？」

トドロキ

「今も自分流でがんばるつす！！」

十二之巻 轟く鬼（前書き）

私！高町ヴィヴィオは！クラナガンに住小学4年生！！

ヒビキさんっていう・・・鬼に変わって人助けする人に出逢って・・・

何かが変わってきました！

今日はトドロキさんって言う人の退院日です！ヒビキさんと一緒にこれから迎えに行きます！

鬼・ヒビキ

夢・高町ヴィヴィオ

長・日高仁志

優・高町なのは

和・持田ひとみ

雷・トドロキ

十二之巻 轟く鬼

十二之巻 轟く鬼

本日のたちはな

「ほいヴィヴィ王、今月の給料だ」

「はい……」

日高が渡した封筒を受け取るヴィヴィオ。妙に軽く重さのかけらも無い。

「……」

意を決し逆さに振ってみると……

チャリン

寂しく落ちてきた日本円にして5円玉。

「おやつさん……これは流石に無いんじゃない……」

「猛士は懲罰おいてシビアじゃねえとな」

「しくしく……」

寂しそうに5円玉を財布に入れて着替えに行くヴィヴィオ。

それを見ていたヒビキは……

「おやっさん……何だかんだ言って少女さんの減給する理由探してますよね？」

「あ、バレた？」

ヒビキに指摘されてニヤける日高。

「いや〜さ〜あんまり度の超えた金額を未成年に渡すのもどうかな〜って思ってた」

「まあ……一理ありますけど……」

「大丈夫〜ちゃ〜んと減給した給料はお母さんに管理してもらってるから〜ねえ〜お母さん」

「キユ!〜!」

そう言っただけでテーブルの下から日高に摘み上げられる白フェレットに化けたなのは。

この後白フェレットのまま、なのはがお話されたのは言っただけでもない。

たちはな資料室

「ふむふむ・・・」

ひとみに資料室に案内されたヴィヴィオは昔のディスクアニマルや音角を手にとつて見ていた。

するとひとみがファイル帳の山をヴィヴィオに手渡した。

「猛士になるなら派遣されてる鬼のことも勉強しないとね」

「はい！」

そう言つてヴィヴィオが見たのは鬼のプロフィールが書かれているファイルだった。

「ええつと・・・響鬼・安達明日夢・・・威吹鬼・天美あきら・・・轟鬼・戸田山登巳蔵・・・え？この轟鬼さんって」

ファイルに目を通すヴィヴィオはふと轟鬼という鬼が目に入った。

「あ！トドロキさんは今最年長のベテランの鬼で今入院中・・・弦の鬼なんだよ。あ！そついえは今日退院するつて言つてたな。ヒビキ君が迎えに行くから勉強のためについていけば？」

「はい！」

そう言っていていそいそと準備を始めるヴィヴィオ。

ヒビキのバイクの後部座席に乗ってトドロキの待つ病院に向かっている。

「はぁ・・・」

「少女さんどうしたの？まさか給料減らされたことにショックだったとか？」

「うーんそろそろヒツちゃんが誕生日だからプレゼントしてあげようって思ってた」

「何買ってあげるの？」

「包丁」

「え？」

凶器的なプレゼントに汗をかくヒビキ。

「なんでそれ？」

「ヒツちゃんがね」

回想

「・・・一流の料理人を目指すのに良い包丁がほしい」

「て言つて金物屋さんジーンとみてただこの間私の目の前で魚捌いてくれたし」

畢を妹みたいに思っているヴィヴィオは可愛くて可愛くてしようがないらしい。

「畢ちゃん・・・それじゃカレー屋さんだけじゃなくて板さんじゃ・・・」

「和食の味をカレーに取り込もうとしてるんだって」

何か複雑なカレーが出来そうな予感がしたヒビキ。

「そつえばヒビキさんご飯自分で作るんですか？」

「作れるけど？今度作りに行こうか？」

「はい！」

ヒビキの手料理を楽しむにするヴィヴィオ。

すると

「着いた！」

ヒビキがバイクを止めると病院の玄関にいる一人の男の姿。

「あ！明日夢君！！」

ヒビキの姿を見ると手を振る青年。

「トドロキさん！ヒビキですって」

「あ！すみません！」

「それにしても・・・トドロキさん！退院おめでとございます！」

「はい！これから自分も前線復帰です」

そう言つて入院の荷物をまとめるトドロキはヒビキとヴィヴィオの
前に来た。

「ん？」

「あ・・・え？この人が弦の鬼ですか？」

ヴィヴィオに気づいたトドロキは挨拶した。

「君が明日夢君の弟子になったヴィヴィオちゃんっすね？自分はト
ドロキっす！！」

「は！はい！高町ヴィヴィオです！！」

トドロキのテンションに圧迫されそうになる。

そしてたちはなに帰還して早々・・・

「それじゃあ！トドロキの退院を祝して！」

「」「かんぱい！」「」

たちはなを臨時休業しジューズやら身内だけでお祝いする猛士メンバー。

「あぐあぐあぐあぐ！！」

日高に出された山盛りの団子を平らげるトドロキ。

「相変わらずよく食うね」

「いや！自分にはこれが一番っす！！ヒビキさん！」

「おやつさんとお呼び」

「あー！すいません！おやつさん！！」

ヒビキと呼ばれたことをトドロキに咎める日高。

「ところでさ〜トドロキ〜今日ちょっとバケガニが現れたみたいでさ〜復帰早々で悪いんだけどさ〜」

「はい！行つてきます！！」

そう言つて威勢よく現場に急行するトドロキだった。

「トドロキさんって凄いバイテアリティーありそうですね」

「それがいい所よ〜ヴィヴィ王もあいつのそういう所は見習ったほうが良いぞ〜」

「はい！」

そう元気良くヴィヴィオは答えた。

その日の夕方

本日の高町家はなのはとユーノは残業、畢もスバルが残業のため高町家で夕食をとるのだが・・・

「本日カレーです」

奥からカレー作ってきたヒビキ。待ち構えていたヴィヴィオと畢。

「おお！」

そう言っただけ食べるヴィヴィオ。

「あ！美味しい」

畢が食べると・・・

「自画自賛・・・」

畢の美味しいのが悔しいのかへそを曲げた回答を聞いて苦い顔をす

るビビキだったりする。

森林

現在トドロキはバケガニを追って森林地帯に現れた。

「!?!」

トドロキの元に一体のディスクアニマル、セイジガエルが駆けつけ
トドロキに情報を渡した。

「ちかいつすね」

あたりを警戒するトドロキ。すると凄まじい衝撃と共にバケガニが
現れた。咄嗟に後方に飛ぶトドロキは持っていた槍を構えバケ
ガニのハサミを殴り飛ばすと槍を地面に刺した。

「!?!」

トドロキは腕のリストバンド・音錠を奏でた。

・・・ジャラーン・・・

荒れ狂う轟きと共に音錠を額に掲げると鬼の紋章が浮かび上がった。

「!!」

そして音錠を天に掲げるとトドロキの元に凄まじい雷が落ちた。

「でえい!!」

鬼

轟

轟鬼

鬼に姿を変えた轟鬼は地面に突き刺していた烈雷を引き抜くとバケガニに向かって跳んだ。

「!!でい!!でえい!!」

烈雷でバケガニの身体を切り裂く轟鬼。バケガニは体重で轟鬼を押しつぶそうと押し掛かるが・・・

「んんん!!でえい!!」

バケガニを吹っ飛ばす轟鬼。すると腰の音撃弦を組み上げ仰向けになっているバケガニに向かって跳ぶとバケガニに音撃弦を突き刺し

た。

「……音撃斬……雷電激震……！」

ジャン……ジャジャジャジャジャジャジャジャジャジャジャジャジャジャジャ……

音

撃

斬

雷電

撃

震

音撃斬・雷電激震

轟鬼の音撃にもがき苦しむバケガニ。

「はああ……！」

ジャン……！

決めの音と同時に爆発するバケガニ。

「バケガニ撃破!!」

音撃弦を回す轟鬼・・・すると・・・

くくくく

「は!!は!!は!!は!!」

場の清めをする轟鬼。轟鬼にとってこの場の清めは欠かす事の出来ないことだった。

「はあ!!」

場の清めが終わり空を見上げる轟鬼は顔の変身を解いた。

「斬鬼さん!俺!精一杯やってるっす!!!今も自分流で頑張るっす!!!」

音撃弦を持ちながらそう叫びトドロキは帰路に立った。

夜になり帰宅するヒビキに突然メールが来た・・・

「ん?・・・ノーヴェだ」

ノーヴェのメールを見ると・・・

合宿に付き合え

十二之巻 轟く鬼（後書き）

オリヴィエ

「タツキさん！」

タツキ

「お？オリヴィエ？」

オリヴィエ

「またタツキさんディスクアニマル弄くってるんですか？」

タツキ

「弄くるも何もこれが俺の仕事だから。ディスクアニマルのことなら俺にお任せ」

龍鬼

タツキ

「因みにこんな式神作ってみた」

ユラ

「いえ〜い・ガシ！！！！！！」

光さんの娘

「じゅるるる・・・ベローン・・・」

ユラ

「て！涎たらしながらあたいを食べようとするな！！タツキ助ける

「!!」

タツキ

「良かったな。ユラ。小さな子に好かれて。」

オリヴィエ

「まあ。それは置いて。とうとう後募集している鬼さんもあと一人か。まだ募集は終了してません。応募方法は十之巻参照で!!」

ヒビキ

「え？皆で合宿？」

ノーヴェ

「親睦を深めるってな!!」

アインハルト

「私ですか？」

ヴィヴィオ

「そっだ！これ持っていったルーちゃんに見てもらおう」

十三之巻 合宿へ

十三之巻 合宿へ（前書き）

私！高町ヴィヴィオは！クラナガンに住む小学4年生！

ヒビキさんって言う鬼に変わって人助けする人に出逢って・・・

何かが変わってきました！！

本日は皆で合宿に行くことになりました！そして・・・あの本も持って行きます！！

鬼・ヒビキ

夢・高町ヴィヴィオ

長・日高仁志

優・高町なのは

和・持田ひとみ

テレビ画面握りながら涙流すヴィヴィオ。埋蔵金を掘り当てたニコラスが余程羨ましいらしい……

「……少女さんテレビに泣きつかなくても良いでしょ」

流石のヒビキもヴィヴィオの行動に引いていた。

「ぐす……だってお金が欲しいわけじゃないけど……これ以上お給料侷しくなったら……」

日高に減給査定されている事がショックなのか涙流し始めるヴィヴィオ。あまりの光景にヒビキは……

「それじゃあ少女さんも掘ってみたら？聖王家や霸王家の隠し財宝なんかが出てくるかもよ？……あれ？」

等と冗談めかして言うてみるヒビキだが振り返った瞬間ヴィヴィオの姿が消えていた。

「うんしょ！うんしょ！！」

たちはなの庭をスコップで掘り始めるヴィヴィオ。アシスタントでツルハシを持ったクリス・飴玉4個で買収された畢もシャベル片手に掘り始めていた。

それを見ていたヒビキは……

「少女さん……冗談だよ……そんなところに隠し財宝なんてある訳ないでしょ」

「物は試しです!!」

必死に庭を掘っているヴィヴィオ。

畢の触角（アホ毛）も地面を探查しているがヒットしない。

そんなに簡単に隠し財宝なんか見つかったら世の中億万長者だらけであろう……

すると……

ガッキン

「!!まさか!!」

ヴィヴィオのスコップが何かにヒットし畢がシャベルで慎重に掘り返してみた。

ヒビキもまさかの出来事に目を丸くしている。

ヴィヴィオが手で掘り返してみると……

「……ガラクタだね」

畢がツッコミをいれ、なんかのガラクタを掘り返したヴィヴィオ。

その姿はとても鞘に収まった巨大な太刀のような物だった。

「何ですかこれ？」

ヴィヴィオの質問にヒビキが考えた結果・・・

「多分・・・この間持田が失敗作の音撃武器を処分してたからその処分を免れた音撃武器じゃない？」

そう推理するヒビキの言葉にガツカリするヴィヴィオ。

その時

「あゝあ・・・こんなに掘り返しちまって」

ヴィヴィオの行動を呆れた様子で見る日高の姿が・・・

そして嫌な予感がしたヴィヴィオ。

「ちゃんと埋めとけよヴィヴィオ。でないと来月の給与査定が楽しみな事になるからな」

「はいいい！！！！」

必死に掘り返した穴を埋めるヴィヴィオ。

「うう・・・これも鬼の修行！！」

ヒビキの弟子になってからヴィヴィオが最も学んだのは・・・

恐らく『ハングリー精神』であろう

尚、ヴィヴィオは折角掘り返したのでガラクタを持って帰ることに

した。

高町家の庭

「んしょんしょ・・・」

庭でホースとブラシを手にガラクタを洗っているヴィヴィオ。

「折角掘り出したんだもん。せめて綺麗にしないと」

そう入れて気合いれてガラクタを洗うヴィヴィオ。

「それにしても・・・掘り返した割りに凄く綺麗だな・・・よつと」

ヴィヴィオが好奇心からガラクタを鞘から抜いてみると、土に埋まっていたとは思えないほどの光沢を持った見事な刃が・・・そして刃に何かの文字が刻まれていた。

その文字は・・・

「え？響鬼？これって!!」

ガラクタを急いで洗うと鞘にも響鬼の名前が・・・ガラクタに響鬼の名前が刻まれている事に驚くヴィヴィオ。

「ヒビキさんの武器かな？今度聞いてみよう」

そう言ってガラクタを物置に置き就寝するのだった。

一方たちばなではノーヴェが訪れていた。その理由は・・・

「なあヒビキ。この間の返事まだだったよな？」

「はぁ・・・」

バツが悪そうな顔で答えるヒビキにイブキが質問した。

「え？どうしたんですか？」

「いやぁ・・・キャンプに誘われたんですけど・・・」

「良いじゃないですか？」

「けどな・・・」

正直行きたくないヒビキ。単純に女性の比率が多いからであろう。

もしくは知り合いが少ないのか・・・前者であろう。

「頼むよ〜畢の相手できるのお前だけだし」

手を合わせて頼み込むノーヴェ・・・するとイブキが助け舟を出した。

「それじゃぁ・・・私も行きましようか？」

「イブキさんが？」

「はいちょうどローテーションがトドロキさんの番になってるので

私も骨休めに」

「よっし決まりだな!!」

そう言って無理矢理誘われてしまったヒビキはもう了承するしかないのだった。

「たく・・・世話の焼けるお嬢様だこと」

ノーヴェの様子を見ていた日高もお茶飲みながら笑っていた。

翌日

「それじゃあ行くぞ〜」

高町家に合流したヒビキ達。

尚、ヴィヴィオは・・・

「えー！ヒビキさんも着てくれるんですか!?!」

「まあ・・・そうになりました・・・」

苦笑いするヒビキと楽しそうなイブキ。

「アインハルトさん!!!全力全開をお願いします!!!」

「はーはいー!」

何やらアインハルトが居る為物凄くテンションの高いヴィヴィオ。

「それじゃあいつてらっしゃ〜い」

「気をつけてね」

日高とユーノに見送られながらヴィヴィオ達は車に、ヒビキとイブキはバイクで向かった。

道中の車内で

「そついえばセインの奴も来るんだと」

「へえ〜」

ノーヴェからセインも来ることが伝えられ楽しみにしているヴィヴィオ。

するとノーヴェは・・・

「変なことしたら啓介呼ぶって言うておいた」

「あははは・・・」

ノーヴェの脅しに苦笑いするヴィヴィオ。

因みにその時のセインの様子

「嫌だあああああああああああああああああああああ！あれもう一回食らうのだけは嫌だあああああああああ！！」

蘇った真空地獄車の恐怖だった。

ふとヴィヴィオは思い立った。

（そういえば……あのガラクタ持ってきたけどヒビキさんに聞くの忘れちゃったな……）

そう言ってバッグの中にガラクタを持ってきたヴィヴィオ。

「まあ……気にするだけお腹がすくかも……」

等と言って到着を楽しみにするヴィヴィオ。

「そうだ！この本もルーちゃんと一緒に見ないと」

そう言って『聖王と七人の戦鬼』という本を取り出すヴィヴィオだった。

だがこの時思わなかった……

このガラクタの秘められていた力に……

十三之巻 合宿へ（後書き）

釋廉慎さんが考えてくださった鬼です。

オリヴィエ

「ゼストさん何やってるんですか？」

ガンキ

「・・・俺の名はガンキ・・・ゼストではない」

オリヴィエ

「いや〜結構男前ですね」

ガンキ

「おい・・・あんまり騒いでると転ぶぞ」

オリヴィエ

「あら〜近所の子どもと遊びに行っちゃった・・・」

・・・古代ベルカ王国・・・東洋人が魔化魍を呼び寄せ忌み嫌われた時代・・・

・・・伝説の宝剣をめぐる戦い・・・

・・・ベルカの国を救うべく立ち上がった東洋人・・・

・・・鬼たち・・・

・・・聖王と共に戦い抜いた男の姿が・・・

・・・その男の名も・・・

・・・響鬼・・・

劇場版 聖王と七人の戦鬼

お楽しみに・・・

ヒビキ

「水切りって・・・何か凄いことやってるね？」

ヴィヴィオ

「ヒビキさんはできますか？」

ヒビキ

「出来ません」

畢

「晩御飯の狩りだ・・・」

ヴィヴィオ

「とうとう始まる・・・古代ベルカの鬼たち・・・」

十四之卷 序章

お楽しみに

十四之巻 序章（前書き）

私！高町ヴィヴィオは・・・クラナガンに住む小学4年生！！

ヒビキさんって言う鬼に変わって人助けする人に出逢って・・・

何かが変わり始めました！！

今日はルーちゃんのところ合宿に行きました・・・あのガラクタを持ってきたんだけどアインハルトさんが変な反応してて・・・私はパパに借りたあの本に目を通すのでした。

鬼・ヒビキ

夢・高町ヴィヴィオ

長・日高仁志

優・高町なのは

和・持田ひとみ

風・イブキ

雷・トドロキ

十四之巻 序章

十四之巻 序章

「到着！！」

時空移動船を乗り継ぎルーテシアの待つペンションまでたどり着いた一行。

「お世話になります」

エリオとキャラロと挨拶を交えるヒビキ達。

そして各々の目的に走った。

「さてと・・・それじゃ荷物を置いて大人メンバーはアスレチックコースに行こうか」

そう言つて大人メンバーはアスレチックコースに向かい・・・

「うし！ガキ共はアスレチックコース裏の水辺に集合な！」

「くくくは〜い」

ノーヴェに引率されアスレチックコースに向かうヴィヴィオとヒビキ達。

残った畢は・・・

「夕飯の狩りだ」

そう言つて釣竿持つて森に入った。

それに気づいたなのは・・・

「あれ？スバル？ヒツちゃんは？」

「・・・畢も最近食っちゃ寝食っちゃ寝ばかりしてサボつてばかりいたからな。鍛えてあげようかなって思ったんだけど・・・残念だな」

腕を組んでそう呟くスバル。

その頃の畢は瞑想しながら流れている川に向かって拳を構えている。

「すうう・・・おりゃあああああああ！！」

畢が拳を突き出すと拳圧で川の流れが逆流した。

「やっぱり・・・本当の強い人つて二年ぐらい食っちゃ寝食っちゃ寝してても衰えないんだね」

そう言つて逆流した川が元に戻る前の干上がった川から魚を回収する畢。実はこれが目的だったりする畢だが・・・

「ん？」

畢が魚を地面に置いた瞬間白い生物・・・フリードが魚に噛み付いた。

「こら！フリード！」

「がぶがぶ」

「だから食べるな！私の朝ごはん兼昼ごはん兼ひよつとしたら晩ごはんなのに！！・・・ん？」

すると背後から何かの気配を感じた畢。振り返ると凄まじい大きさの熊が・・・

アスレチックコースの裏にある水辺に集まったヴィヴィオ達とヒビキとイブキ。因みにヒビキとイブキ以外は水着だった。

「なんか・・・居づらいな」

「ヒビキ君・・・鼻の下伸ばしてると持田さんに言いつけますよ」

「違うよー！」

男女の比率的に居づらいヒビキにイブキは冗談を言つと・・・

「ヒビキさん一緒に泳ぎませんか？」

「遠慮します〜」

叫ぶヴィヴィオに手を振って答えるヒビキ。

すると

ノーヴェとアインハルトが合流した。

「……あの……特訓とかはしないんですか？」

「ま……その前に今は思いっきり遊んでおけ。それにあいつらの遊びは結構マジだからよ」

「？」

訳が分からないアインハルトはそのまま水辺に入っていくと皆と泳ぎ始めた。

ヴィヴィオたちに付いていこうとアインハルトが泳ぎ始めるが速さが違いついていけない。

(は……早い!というか……皆凄い元気な気が)

いつの間にか岸で座り込んでいるとヒビキとイブキが駆け寄ってきた。

「ああやって水の抵抗を身体に受けて鍛えてるんだね」

「え？」

ヒビキの解説に考えるアインハルト。

「確かに・・・水の中で泳げば遊びながら鍛えられる・・・柔軟な発想ですね」

イブキの解説にヒビキは・・・

「若者らしい柔軟な発想ですね」

「そうですね・・・若いですね皆さん」

哀愁漂わせるヒビキとイブキに目が点になるアインハルト。

するとノーヴェが

「お前ら老け込むの早すぎるぞ・・・よっし！お前ら！そろそろ水きり始めるぞ」

「」「」待ってました！」「」

ノーヴェの合図に水辺のヴィヴィオ、コロナ、リオが構え始めた。

何をするかと思いきや全員が構え始め凄まじい正拳を見せた。

すると水飛沫が舞いあがり水面が割れた。

それを見ていたヒビキは・・・

「うっわ～凄いですね」

「ヒビキさんは出来ますか!?!」

目を輝かせて言うヴィヴィオに対しヒビキは・・・

「ごめんなさい・・・僕できません」

そう言ってさじを投げるヒビキだった。

一方大人組では日頃から体力を使っているのはとスバルを他所に他のメンバーはへばっていた。

するとなのははある事に気づいた。

「そういえばヒツちゃん何やってんの？」

「・・・まさか今頃何か食べ物探してたりして・・・」

なのはの言葉に答えるスバル。

「そんな事・・・ありえるね」

その頃の畢

「ぜえ・・・ぜえ・・・」

「ぐんぐんぐんぐん・・・」

山中で熊と格闘しているその理由は・・・

「観念して私の夕飯になれ!!」

「ぐるぐるぐる!!」

そうやって熊と戦っているのだった。熊も夕飯になって溜まるかといつた具合に抵抗しまくっている。

再び海辺に戻るとアインハルトも加わり水切りに夢中になっていた。ヴィヴィオとアインハルトの競い合いを微笑ましく見ているヒビキとイブキ・・・

その時だった・・・

「明日夢君!あきらさん!!」

突然背後から何者かに声をかけられ振り返るとそこにはトドロキの姿が・・・

「トドロキさん?何でここに」

ヒビキの言葉にトドロキは・・・

「いえ!ここに魔化魍が出たって情報が入って・・・あ!!」

トドロキが指を刺すを水面から何かが盛り上がり始めた。

「うわああ!退避いい退避いい!!」

そう言って岸に上がるヴィヴィオ達。

するとせり上がってきたのはアミキリだった。

バケガニの変異体であるアミキリを見つけたのかいつの間にか畢が立っていた。

「ヒツちゃん！！何してるの逃げなきゃ！」

ヴィヴィオの言葉に畢は・・・

「決めた・・・あいつをかに鍋にして蒸し海老にする・・・ん？」

魔化魍を食材にしようと思論んだ畢を縄で巻いて回収するヴィヴィオ達。

「響鬼さん！ヒツちゃんは任せて思いつきり戦ってください！！」

「は・・・はい」

そう言ってヒビキは音角。イブキは音笛。トドロキは音錠を構えた。

・・・キーン・・・

・・・ヒュルリリ・・・

・・・ジャラーン・・・

静かな響きと息吹・・・そして荒れ狂う轟きが響くと各々が変身具を

額に掲げた。

鬼の紋章が浮かび上がると紫の炎に身を包まれるトビキ。

風を纏うイブキ。

雷を浴びるトドロキ。

「あああああ・・・あああ！！」

炎を吹き飛ばし姿を変える響鬼。

「・・・はっ！！」

竜巻を切り裂き姿を変える威吹鬼。

「でえあああ！！」

雷を振り払い姿を変える轟鬼。

撥・管・弦の鬼が揃った。

「わあ・・・壮観だな」

三人の鬼の姿に圧倒されるヴィヴィオ。すると響鬼達はヴィヴィオ達がいる手前早期決着を試みるべく飛び掛った。

ヨオ！！

アミキリに音撃鼓を捻じ込む響鬼は音撃棒を構えた。

「は！」

ダンドンダンドン！！

清めの音を叩き込む響鬼。

「でえい！！！」

音撃弦を差し込む轟鬼。

「でえい！せい！せい！」

轟鬼が音撃弦を奏で・・・

「は！は！は！！！」

鬼石を打ち込む威吹鬼。

そして音撃管を奏でた。

撥・管・弦の奏でる大合奏の音撃に見とれるヴィヴィオ。

そして・・・

「はぁぁ・・・は！！！」

響鬼の音撃棒が叩き込まれると爆発するアミキリ。

「災難だったね〜」

食事の支度をしながら昼間に現れたアミキリの事を話し合うスバルたち。

「けど！ヒビキさんの大合奏を見れたから良しだよ〜」

「あら？包丁忘れてきちゃった」

メガーヌが野菜を切る包丁を忘れてきたと聞いた瞬間ヴィヴィオがある物を差し出した。

「だったらこれ使ってください」

「へ？」

ヴィヴィオがバッグから出したのはたちばなの庭から掘り当てたガラクタ・・・

「持ってきてたんだ・・・」

呆れるのは・・・するとそのガラクタをみたアインハルトの表情が変わった。

（あれは！！剛烈剣！！何故彼女が剛烈剣を持つてるの！？）

ヴィヴィオの持っているガラクタを剛烈剣と思ったアインハルト・・・
・そんなアインハルトをよそにヴィヴィオは・・・

「大丈夫ですってこれ使っていない剣みたいですから切れ味は良いんじゃないですか？」

(て！剛烈剣になんて粗末な事を！！)

そう言っつてガラクタをメガーヌに差し出そうとするが・・・

「剛烈剣をそんなことに使っちゃダメです！！」

「「へ？」」

アインハルトの言った剛烈剣という言葉に驚くヴィヴィオ。

「え？どうしてですか？」

「いや・・・その・・・霸王が泣いちゃいそうなので」

「そうですか」

そう言っつてガラクタをしまっヴィヴィオ。

そしてバーベキューや料理が完成し全員が食卓を囲むと・・・

「「「いただきます！！」」」

料理にがつつき始めるヴィヴィオたち。するとルーテシアが何かを持ってきた。

「今日はとっつても珍しいもの作ったんだ」

更に

「南無南無南無・・・」

木魚持つて手を合わせてお経まで唱え始めた。

「ちょ！ヒツちゃん！食べ物粗末にしちゃダメっていつも言うてるでしょ！！」

畢がいつも言っている言葉を言うヴィヴィオに畢は・・・

「・・・だって私【バツタ人間】だもん」

「!！」

畢の考え方に凍りつくヴィヴィオ。するとスバルが何かを思い出したように呟いた。

「ああそういえば私がイナゴの佃煮出したとき畢は庭に埋めてアイスの棒を5センチ置きに刺してたな」

「アイス食べさせられたあたしの身にもなれ」

そう言うスバルとティアナ。

「だからあれ以来私イナゴの佃煮だけは絶対に出さないことになった・・・気持ち分からもなくもないから・・・」

これ以上は突っ込みたくはなくなったのでスルーを決め込むヴィヴ

イオだった。

食器洗いが終わり休憩時間になると書庫に訪れたヴィヴィオ。

ヴィヴィオはユーノが持ってきた『聖王と七人の戦鬼』という本を読み始めた。

「えっとこの話のあらすじか・・・この物語は・・・戦乱のベルカ時代・・・聖王家の持つ伝説の宝剣を求め争いあった時代・・・その剣の名を剛烈剣・・・え？」

昼間アインハルトが呟いた剛烈剣という言葉に慌ててガラクタ・・・いや剛烈剣を持つてくるヴィヴィオ。

「これって・・・まさか・・・」

剛烈剣を見つめながら続きを読み始めるヴィヴィオ。

「・・・剛烈剣をめくり争った覇王家・・・冥王家・・・そして孤
独な聖王と共に戦った戦士の名は・・・響鬼・・・」

ヴィヴィオの中で本の中の登場人物を決め始めていった。

十四之巻 序章（後書き）

予告

復活した邪悪なる邪眼・・・その狙いは・・・太陽・月・星の三つのキングストーン・・・

邪眼

「この世界は私がもらう!!」

邪眼は冥王と共に復活を果たした・・・全てが絶望になったその時

あの男が帰ってきた!!

光太郎

「この世界を貴様の好きにはさせない!」

シャドームーン

「南光太郎の首は誰にも渡さん」

畢

「合わせよう・・・私達のキングストーンの力・・・」

光太郎

「邪眼!お前と再び戦おう!!」

仮面ライダーBLACK

シャドームーン

仮面ライダーアース

劇場版 リリカルなのは 漆黒の男
return

民衆

「鬼なんか死んじまえ!!」

ヒビキ

「あれ？君は王様の」

オリヴィエ

「あんなのせいで皆死んだんだ!!」

ヒビキ

「あゝそれで僕のこと恨んでるんだ」

オリヴィエ

「お前なんて死んじゃえ!!!!」

十五之巻 古代ベルカ

お楽しみに

十五之巻 古代ベルカ（前書き）

私！高町ヴィヴィオは！クラナガンに住む小学4年生！！

ヒビキさんっていう鬼に変わって人助けする人に出逢って・・・

何かが変わってきました！！

聖王と七人の戦鬼という本を読みはじめた私はヒビキさんとの絆・
・そしてたちはなの庭から掘り返したガラクタの正体を確かめるの
でした。

鬼・ヒビキ

夢・高町ヴィヴィオ

長・日高仁志

優・高町なのは

和・持田ひとみ

覇・アインハルト・ストラトス

十五之巻 古代ベルカ

十五之巻 古代ベルカ

本を読みながら登場人物達に思いをさせていくヴィヴィオ。

そして登場人物を自分の脳内で知り合いに置き換えるのだった。

古代ベルカ時代聖王家オリヴィエは血生臭い臭いに導かれていった。

「!!!」

その臭いの先に居たのは血の海に沈んだ父と母……そして……

「……………」

……太鼓の撥を持った鬼の姿が……

「鬼がやったんだ!! 鬼が!!」

そう言う側近達の言葉に……

「う!う! あああああああああああああああああ!!」

鬼に父と母を殺され絶叫するオリヴィエ。

「はー!!」

突然ベッドから飛び起きる現代の高町ヴィヴィオにそっくりな少女オリヴィエ。周囲がまだ薄暗いところを見るとまだ夜明け前のようであり、オリヴィエは気持ちを落ち着かせ荒くなっていた息を整えた。

「また・・・あの夢・・・」

自分の父と母が鬼によって殺された忌まわしき夢。忘れようと思っても忘れられない夢。

ここはシュトゥラ王国の家城。聖王の座を継承したオリヴィエはシュトゥラ王国に捕虜として生活を送っていた。

「・・・ざわざわ」

何やら給仕たちが騒いでいたのでオリヴィエは表の門に出てみると其処には魔化魍に食い殺された人間の死体があった。

「うー!!」

思わず吐きそうになるオリヴィエ。

「・・・また魔化魍よ・・・」

「ああ・・・朱天童子っていう最強の童子が引き連れてる九尾の狐
だろう？」

「本当・・・鬼が着てから魔化魍が出てきて困ったもんよ」

「はあくあ・・・聖王様が剛烈剣のありかをとつと云ってくれればな」

そう云って噂話をする住民達に耳を塞ぎながらオリヴィエは奥に入
っていった。

「・・・・・・・・」

聖王家の秘宝とも言われている宝剣・名は剛烈剣。その刃はこの世
に切れぬもの無しと言われていた。

だがそんな剣の事など全く聞かされていなかったオリヴィエは口を
閉ざしている物と思われ込まれ捕虜になったのだ。

知っていればとつくに言っているオリヴィエ。

傷ついた人を見殺しに出来るほど冷徹ではない。

広間

幹部や側近達が集まり会議が開かれていた。

「これで・・・10人か・・・」

九尾の狐に生贄に差し出されたのもう10人の上っていた。生贄のたびにひと時の安息を得ていたシュトウラ王国。

「近年現れた九尾の狐・・・東洋人が現れてからそれを追うように現れた魔化魍・・・早急に手を打たなければ・・・」

「速く聖王に剛烈剣のありかを問いたただすか・・・あるいは鬼の力を借りるか」

「鬼は東洋人だろう？東洋人は信用できない！！何せ東洋人が魔化魍を連れてきたのだからな」

会議がもめ始めると・・・

「王様！！」

「何だ！？」

側近が書状を持って現れると目を通し始める王。

「・・・我が子クラウドを差し出せ・・・くっつ！！」

魔化魍からの書状でありそれを握りつぶす王は決意した。

「出陣の用意だ！！魔化魍を打つ！！」

王の乱心に側近達は止める。

「待ってください！力が違いすぎます！死に行くようなものです

「!!」

「離せ!!これ以上!やつらを伸ばさばさせておくわけには」

「せめて剛烈剣が無いと!!」

そう言った側近その時。

「待ってください!!」

突然広間に入ってくるオリヴィエに側近達は・・・

「まさか・・・剛烈剣のありかを言うのか?」

「残念ですが・・・剛烈剣のありかはわかりません」

「でたらめを言うな!」

「本当です!」

オリヴィエを締め上げる側近。だがオリヴィエは気丈に答えた。

「鬼の力を借りればクラウドは死ににいかなくて良いんですね?」

「聞いていたのか?」

「はい・・・私が鬼を集めます・・・私の責任で鬼を集めます!!」

オリヴィエの言葉にざわつく広間。

オリヴィエは部屋で荷物を纏めだした。許可が下りたのだ。たとえ探しに行く途中でもオリヴィエだけが死ねば王家としては痛くも痒くもない。

門の前に立つとそこにはクラウスがたっていた。

「オリヴィエ・・・なんで君が？」

「クラウス・・・大丈夫・・・すぐに戻るから」

命の保障のない旅だがオリヴィエはクラウスを救うべく決意を固め憎き鬼を探しに行くのだった。

それから数日鬼の噂を聞いては西へ東へと道を行くオリヴィエ。山道・丘・町など至る所で鬼の情報を集めようとするが噂一つ聞かない。

それもそのはず、この世界では魔化魍が現れたのは鬼が連れ込んできたという噂が流れている為皆が鬼を忌み嫌うのだ。おまけに敵の朱天童子は最強の鬼の名を欲しいがままにしている。

「ふう・・・」

噂もないのに鬼を探すなど雲を掴むような話だ。野宿しながら旅を続けるオリヴィエ。風の噂で王家は戦の準備をし始めてると聞きこ

のままでは全員が犬死にってしまう。

「ん？」

ある日朝の食料を分けてもらおうと海沿いの漁港に立ち寄ったオリヴィエ。だが持ち合わせは少なく海に糸をたらそうとしたその時だった。

「！！」

突然海から異型の生物が現れた。

「ま！魔化魍！！」

魔化魍河童である・・・河童はオリヴィエに目をつけオリヴィエを食そうとしたその時。

「！！」

河童に向かって籠が飛んできた。突然のことにパニックになるオリヴィエと河童するとオリヴィエの前に近くにいた海女が立ちほだかった。

「ちょっと！人がお仕事している時に何！？」

どうやらオリヴィエを助けた籠はこの女性が投げたようだ。そして河童の攻撃をあっさり弾き飛ばし蹴り離れた。

「・・・さあつてと・・・それじゃあ行きますか」

「!?!」

女性が懐から取り出したものに目が釘付けになるオリヴィエ・・・

そして

ヒュルリリリッ

「・・・揺夢鬼」

女性・ユラメキが鬼笛音笛をを奏でると凄まじい水が巻き起こりユラメキの姿が変わった。

「はあ!?!」

身体に纏った水を吹き飛ばし人魚のような鬼の姿を見せる揺夢鬼。

「鬼!?!」

念願の鬼を見つけたことに驚くオリヴィエ。

すると

「!?!」

音撃笛・泡沫を構える揺夢鬼はそのまま河童に突撃した。

「は!?!は!?!てああ!?!」

泡沫の管部分から鞭が引き出され三連撃が浴びせられると右手に法力をため始めた。

「はあ!!」

鬼闘術逆鱗で殴りつける揺夢鬼は河童を突き放すと手に持っていた鬼石を烈火指弾の要領で河童に打ち込んだ。

「音撃破!! 竜宮乱舞!!」

泡沫を奏でる揺夢鬼。すると泡沫から水の竜巻が巻き起こり河童を飲み込んだ。そして竜巻に貫かれ鬼石が弾けとんだ。

「ふう〜」

河童を倒し元に戻るユラメキ。尚現代と違い衣服などは失ってはいない。

「大丈夫だった？」

現代のギンガ・ナカジマにそっくりなユラメキに駆け寄られるオリヴィエ。

その時

ぐ〜

オリヴィエのお腹が盛大になった。

「なに? お腹空いてるの?」

「あははは・・・」

照れ笑いするオリヴィエ。

その結果

「よおっしほらほら一杯食べなよ」

そう言つてユラメキは自分が採つてきた海産物を焼いてオリヴィエにお腹一杯振舞つた。

「へ？鬼を探してるの？」

「はい・・・九尾の狐が」

九尾の狐と聞いて笑顔が硬くなるユラメキ。

「そつか・・・お世話になつてる漁港の人もあるし・・・そろそろやらなきゃいけないと思つてたけど」

「じゃあ！引き受けてくれるんですか？」

目を輝かせるオリヴィエにユラメキは・・・

「残念だけど・・・私じゃ勝てないな・・・」

「え？」

「勘違いしない！私一人じゃ勝てないだけだから・・・仲間を集め

れば絶対に勝てる！！だから安心してどんどん食べて」

「はい！！」

そう言っただけでつきながら食べるオリヴィエだった。

その後ユラメキが加わり知り合いの鬼を紹介されると案内されるオリヴィエ。

今度は山道に入っていた。

「あれがヒビキさんの庵」

町外れの草臥れた庵を指差すユラメキ。何やら面白くなさそうに着いていくオリヴィエ……

「……若いけど結構腕が立つよ」

ユラメキに案内され庵の中に入るオリヴィエは何やら異様な臭いに包み込まれた。其処には蘭法医のような青年の姿があった。蘭法医にあまりいい思い出のないオリヴィエ。

「ヒビキさん！」

「……ん？……ユラメキさん？」

後ろを向いて煎じ薬を作っていたヒビキが振り返るとその顔を見たオリヴィエは……

「お前……」

「え？」

「うわあああああああああああ！！」

絶叫の中庵を飛び出すオリヴィエを追うユラメキ。

外に出たオリヴィエを引きとめ事情を聞くユラメキ。

「ちよつと！どうしたの!？」

「あいつだよ！！あいつが私の父と母を……」

オリヴィエから詳しい事情を聞こうとしたユラメキに……

「あれ？もしかして……君王様の？」

「!?!」

飄々と出てくるヒビキを睨み付けるオリヴィエ。だが悪びれも無くヒビキは続けた。

「ああ、それで僕のこと恨んじゃってるんだ……もっと前向いて生きなよ」

「うるさい黙れ！！お前なんか死んじゃえ!!!!」

そう言ってヒビキの前から逃げるように去るオリヴィエとそれを追うユラメキ。

「ちょっとオリヴィエ！」

「あいつの力だけは絶対借りたくない!!」

その事に事情を察したヒビキは・・・

「まさか・・・戦えって言ってますか？ああ〜そういうの勘弁してくださいそれじゃあ〜」

そう言って飄々と去っていってしまった。

だがその背中はどこか寂しそうでもあった。

繁華街・蕎麦屋の光さんの店

「ずるずるずる」

唯一東洋食が食べられる光さんの店で蕎麦を食べるユラメキと出された蕎麦をじつと見つめるオリヴィエ。

「あれ？食べないの？」

「・・・・・・・・」

光さんの蕎麦を見つめながらだんまりを決め込むオリヴィエ。

「光さんの料理美味しいよ？光さん！おかわり!!」

「はいはい」

そう言つてユラメキに天井を出す現代の南光太郎にそっくりな光さん。

「元気出しなよ〜そうだ!! 男の鬼が駄目なら・・・女の鬼だけ集めるから〜ね?」

そう言つユラメキに少し安心するオリヴィエ。

「そつだ!?! 光さん! 知り合いに女の鬼さん居ない?」

「何で?」

「いや〜光さんの店は唯一東洋食を食べられるから鬼が集まるかなあ〜つて・・・何なら光さんが黒い人に変身しても良いし・・・光さんのお嫁さんか娘さんが・・・」

「生憎僕は変身しないし奥さんも娘も変身できません」

きつぱり否定する光さんに奥から・・・

「な〜に? 呼んだ〜?」

そう言つて出てくる現代のスバル・ナカジマにそっくりな光さんの嫁。

ピンポン

キャストは全てヴィヴィオの妄想によって決められている為現実ではありません

落ち込んでいるオリヴィエを見た光さんは・・・

「まあ・・・これでも食べなよ」

そう言つて光さんがオリヴィエにぬか漬けを出すとそれを摘む光さんの娘。

「こら！娘！お客さんのもの摘んじゃダメでしょ！」

「だって美味しそうだったんだもん・・・ていうか私が漬け込んだし」

そう言つて自作のぬか漬けを平らげようとする光さんの娘。するとユラメキは・・・

「ええい！光さん！本題は！？」

「あ！そうそう！この先の山に一人知り合いが居るな」

「へ？いった道じゃん！名前は！？」

「確か・・・イブキちゃんって言ったかな」

「イブキかゝあの女役に立つのかな」

「・・・行きます!」

オリヴィエはそう決意してイブキを尋ねに山へ向かうのであった。

・・・そして・・・

「・・・」

オリヴィエの姿を見守るあの男の姿が・・・

十五之巻 古代ベルカ（後書き）

オリヴィエ

「これだけ揃えば・・・」

ユラメキ

「うんうん！！」

イブキ

「それじゃあ・・・女性だけでやりましょうか」

ヒナキ

「レッツラゴーってね」

ユラメキ

「まだ仲間を集めないと・・・」

十六之巻 敗北

お楽しみに

十六之巻 敗北（前書き）

私！高町ヴィヴィオは！クラナガンに住む小学四年生！

ヒビキさんっていう鬼に変わって人助けする人に出逢って・・・

何かが変わり始めました！！

本を読み続ける私はオリヴィエがヒビキさんのことを怨んでいること
とに驚きを隠せず・・・

鬼・ヒビキ

夢・高町ヴィヴィオ

長・日高仁志

優・高町なのは

和・持田ひとみ

風・イブキ

十六之巻 敗北

十六之巻 敗北

イブキが住むという山

「こつちこつち」

ユラメキに案内されながらオリヴィエは鬼イブキを尋ねていた。

「こんな人気の無い山に居るんですか？」

「鬼って言うのは怨まれる存在だから人里離れた場所に居たりするのよ」

ユラメキの言葉に納得するオリヴィエ。

すると尺八の音が聞こえてきた。

「え？尺八・・・あ！」

音色に導かれ滝つぼに訪れるオリヴィエとユラメキは尺八を吹いている虚無僧の姿を捉えた。

「あの人が光さんの言っていた・・・」

「あの楽器は東洋の楽器・・・ん？」

虚無僧がオリヴィエに気付き近寄ってきた。警戒するユラメキだが目の前で虚無僧は笠を取った。

「・・・お待ちしました」

笠の下から出てきたのは美しい女性だった。

「あなたが・・・イブキさん？」

「はい・・・風の噂であなた達が私達鬼を集めていると聞きこの山まで着ました・・・さあ！行きましょう」

「え？けどこの人数じゃ！」

先を急がせるイブキにオリヴィエは付いていけず反論するがイブキは・・・

「大丈夫です。私にもまだ死てはあります」

「え？鬼の知り合いがいるんですか？」

「ええ」

「よし！いこうー」

イブキの言葉を聞いたユラメキは張り切って山を降りた。

再び光さんの店

「ずるずる……うん光さんのお蕎麦美味しい」

「どうも」

メガネをかけた女性にほめられて照れる光さんに嫁が光さんの耳を引く張った。

「いでで」

「お前さん……浮気はダメだよ」

「浮気じゃないって!」

そう弁解する光さん。すると光さんの娘が女性の腰の板に齧りついていた。

「……硬い」

「ちょっと!娘ちゃん!お煎餅じゃないのよ!」

そう言われると口を離す娘。

そして

「……こんにちは」

イブキを引き連れたオリヴィエが帰ってくるとイブキが女性に話し

かけた。

「ヒナキさん」

「え！？イブキ！？」

ヒナキと呼ばれたメガネの女性。この人物も鬼だった。

ヒナキに事情を話すオリヴィエ達。

「ふむふむ・・・どうやら厄介なことになったみたいね」

「ええ・・・やらなきゃいけない時です」

「よし！一肌でも二肌でも脱ぎましょうー！」

こうして加わったヒナキ。

3人もベテランの鬼が揃ったことにより決戦するべく出陣した。

3人の鬼の女性が九尾の狐の待つ岬に辿り着くと変身鬼笛を構えた。

「・・・雛鬼」

ヒュルリリッ

三人が音笛を奏でると額に掲げ鬼の紋章が浮かぶ上がった。

風・水・花びらが舞い上がり鬼に変身する威吹鬼・揺夢鬼・雛鬼。

『鬼・・・か・・・』

鬼の気配を感じた朱天童子が九尾の狐を放った。

『ギユアアアアアアアアアアアアアアアア！』

3人の鬼の前にその巨体を現す九尾の狐。

「この魔化魍を倒せば・・・解決ってわけですね」

「そゆこと」

張り切って音撃管を構える威吹鬼と横笛・風幻を構える雛鬼。

「それじゃあ・・・行くよ!!」

揺夢鬼の合図で一斉に飛び掛る3人の鬼。

「先手必勝!!」

雛鬼の風幻が九尾の狐に突き刺さるが・・・

『ギユアオオオオオオオオオオオオオオオオ!!』

「うわ! ああ!!」

あまりの巨体で効果が出ず振り回されてしまう。そのまま吹っ飛ばされた雛鬼は空中で体制を立て直しかまいたちを放った。

『ギユアアアオオオオ!!』

ダメージを食らい九尾の狐は苦し紛れに尻尾で雛鬼をはたいた。

「ぐあ!」

「雛鬼さん!は!!」

音撃管で銃撃する威吹鬼。すると威吹鬼の身体に尻尾を巻きつけ振り回す九尾の狐。

「威吹鬼さん!う!!」

九尾の狐の放つ火炎弾を咄嗟に防ごうとする揺夢鬼だが火力が多すぎてジリ貧になった。

「・・・そんな・・・」

影からその光景を見ていたオリヴィエ。危ないから下がれと言われたのだが心配になりついてきてしまったのだ。

最強の魔化魍と言われている九尾の狐に追い詰められていく3人の鬼。

「く!!」

傷つき倒れてしまった鬼達。

「ここは・・・退却しましょう」

「異議なし」

「く！」

威吹鬼の言葉に撤退する鬼達その光景に崩れ落ちるオリヴィエ。

「そんな・・・」

折角力を貸してくれた鬼がなす術も泣く撤退するさまに絶望するオリヴィエ。すると九尾の狐がオリヴィエの気配に気付いてしまった。

「は!!！」

咄嗟に岬の上に逃げるオリヴィエ。だが崖に追い詰められてしまう。

「貴様が鬼を連れてきたのか？」

現れた朱天童子に追い詰められるオリヴィエ。もう逃げる術が無い。

「死ね!!！」

「!!！」

朱天童子が腰から剣を抜きオリヴィエに向かって振り下ろそうとしたその時。

「!!！」

朱天童子の手に小刀が投げつけられ刺さった。

「!?!」

朱天童子をすり抜け逃げようとするオリヴィエだが・・・

『ギユアアアアアアオオオオオオオオオオ!?!』

「きゃあああああああああああ!?!」

九尾の狐の尻尾に跳ね飛ばされ崖から転落してしまうオリヴィエ。

「・・・ひ!?!」

絶命を確信し気を失ったその時。

「!?!」

落下するオリヴィエを抱きしめる影が・・・

「・・・う・・・ん・・・ん?・・・生きてる・・・私・・・生きてる・・・え?・・・」

崖下でオリヴィエが目を覚ますと足に痛みを感じた。挫いた様だが

足を見ると治療が施されていた。

「これって・・・なに？」

何やら変わった治療薬を使われているがその腕は確かだった。

「オリヴィエさん！」

「イブキ・・・さん・・・」

落下したオリヴィエの元に駆けつけるイブキがオリヴィエの足を見た。

「これは・・・蘭法・・・」

オリヴィエの足はイブキ達鬼の故郷の治療法だった。今この世界に置いてこの治療が出来る男は一人しか居なかった。

十六之巻 敗北（後書き）

イブキ

「また鬼を集めないと・・・」

ヒナキ

「当てが無いわけじゃないんだけど」

ユラメキ

「何でも良いから探しましょうよ!..!」

トドロキ

「ヒビキ君・・・まだ戦う決心が・・・」

十七之巻 集結する鬼達

十七之巻 集結する鬼達（前書き）

私！高町ヴィヴィオは！クラナガンに住む小学四年生！

ヒビキさんという鬼に変わって人助けする人に出逢って・・・

何かが変わってきました！！

過去のヒビキさんを恨むオリヴィエ・・・そしてそんなオリヴィエを親の仇と言われ続けながらも見守るあの人。

そしてユラメキさんが鬼探しを・・・

鬼・ヒビキ

夢・高町ヴィヴィオ

長・日高仁志

優・高町なのは

和・持田ひとみ

風・イブキ

十七之巻 集結する鬼達

光さんの店

「痛……」

痛む足を押さえながらオリヴィエが次の手段を考えていた。

「ちよつと！まだ無理だよ！」

「だめです！クラウドを救うには私が」

光さんに止められるオリヴィエだがクラウドを救う為に休んで入らない。

「ユラメキさん達が去った今……もう頼れるのはあれしか……」

そう、九尾の狐の強大な力にユラメキ達は去ってしまったのだ。

そしてオリヴィエの次の手段とは……

「剛烈剣を探します!!」

足に包帯を巻きながら旅支度をするオリヴィエ。そして奇妙なことに気付いた。

「これって……」

気絶しているときに翡翠のようなものでできた腕輪を巻きつけられていたのだ。

だが考えている間はまだ無かった。

一方岬では

「……このまま終えてしまつんですか？」

イブキの言葉に詰まるユラメキとヒナキ。正直このまま放っておくのも心苦しいらしい。

「よっし！ここは決めましょう！」

「何を？」

「もっと仲間を集めるんです！！！」

ユラメキの言葉にヒナキは……

「まあ……当てが無いわけじゃないんだけど……」

「それじゃあ早速……」

ユラメキはヒナキの当てを当たるのであった。

光さんの店

「光さんの蕎麦は美味しいな」

そう言っつて光さんの蕎麦をすすつている青年・タツキ。

「ありがとうね」

「ところでさ。こんなもん作つてみたんだけど」

タツキが念を集中すると・・・

ポン！！

「いええい！！」

妖精みたいな式神が現われた。

「凄いね」

「人型の音式神を作つてみようとしたらな偶然できたんだよ！」

「ディスクアニマルの前のバージョンか」

感心する光さん。

「いえ〜い！恐れ入ったか！！あたいはユラだ！」

するこ

ポトン！！

「ん？なんだ？この全身を多い尽くす粘液・・・涎だ・・・なぬ！」

ユラの事を熱い視線でジーツと見ている光さんの娘。そしておもむろにユラを掴み取り・・・

「じゅるる・・・はむはむ」

食べた。

「こつらあああ！！あたいを食べようとしてんじゃねえ！！」

光さんの娘の口の中で叫ぶユラ。

そこに・・・

「こら！娘！食べちゃダメ！！」

「・・・だって美味しそうだったんだもん」

「それでもダメー！！！！」

絶叫する光さんの嫁が涎まみれになったユラを救出した

尚、タツキは笑い転げ光さんは苦笑いしていた。

「そういえば光さん黒い人に変身しないの？」

「タツキ君・・・話が違うし僕はしがない料理屋さんです」

「ちえ・・・光さんが変身できたら九尾狐なんて楽勝なのにな」
「そらやって光さんにやらせてサボるきつしよ」
「ギク!!」

戯れているタツキの背後からヌツと現われるヒナキ。

「ヒナキさん・・・彼は？」

「ユラメキさん・・・こいつはタツキ・・・私の弟！」

「どつも」

ぶつきら棒に挨拶するタツキ。

「さあ〜ってタツキちゃん〜一緒に来てもらおうかな〜」

「ヤダ!めんどい」
「着てくれなかったら言っちゃおうかな〜タツキの恥ずかしい過去」
「行く行く行く!!」

こうしてヒナキの脅迫?によってタツキが加わるのであった。

山岳地帯

「わいわい!!」

「.....」

山の孤児院で子供達を見守る現代のゼストにそっくりなガンキ。

すると

「・・・イブキか？」

「ガンキさん・・・お久しぶりです」

尺八を持ちながらイブキが現われるとガンキが立ち上がった。

「まさか・・・来るのか・・・」

「はい・・・あなたの力が必要なんです」

目を閉じ全てを悟ったガンキは立ち上がり・・・

「では・・・行くか・・・子供達に挨拶を済ませてくる」

「お願いします」

イブキに案内され山を降りるガンキ。

一方

「はあ・・・はあ・・・」

松葉杖を突きながら旧聖王家への道を辿っているオリヴェイエ。

「手がかりがあれば・・・絶対に・・・剛烈剣を!!」

聖王家に伝わる宝刀。

剛刀・剛烈剣の手がかりを旧聖王家跡に求めたオリヴィエ。

その姿を遥か後方から見守る影が・・・

光さんの店

「ねえお前さん」

「何？」

「うちのお店には鬼が集まるジंकクスでもあるのかな？」

そう呟く光さんの嫁に苦笑いする光さん。

ユラメキ達は光さんの店に拠点を置いたらしく今まで集めた鬼達が根城にしていた。

そこに

「どむっ」

光さんの店に入ってきたトドロキの姿が・・・

「トドロキさん！」

「お前どうして？」

「どうもっす！いや〜ヒビキ君に頼まれてきたんすよー！」

「ヒビキさんに？」

ヒビキの依頼で着たという話に驚く鬼達。

そこに

「あ！俺の弟子も連れてきました！デーンキー！！」

「……………」

トドロキの後ろから出てくる現代のエリオにそっくりなデーンキ。

「うわ〜無口〜」

「師匠がおしゃべりなんで……………」

「反面教師って奴ね」

ヒナキの言葉にうなだれるトドロキ。

「僕も戦いますよ…………もう鬼としては一人立ちしましたし…………」

トドロキさんの頼みなら断れません」

「おお〜元気いいねえ・・・これだけいけば!!」

そう宣言するユラメキ。

ユラメキ・ヒナキ・タツキ・ガンキ・デンキ

イブキ・トドロキ

七人の鬼が集まり決戦に備え就寝するのだった。

そして光さんは・・・

「僕のお店鬼のみんなの拠点になったのかな？」

そう呟いた。

一方夜の街道

「はあ・・・はあ・・・」

疲労しながら長い街道を一人行くオリヴィエ。既に怪我をした足では限界を超えているのにもかかわらずそれでも剛烈剣の手がかりを求めていた。

その時だった。

「!!!」

オリヴィエの足元に打ち込まれる矢にオリヴィエは足を止めてしまった。

するとたいまつを片手に現われる山賊達。

「おい！小娘！俺たちの縄張りに入ってくるなんていい度胸だな！
！ちようどいい・・・有り金全部置いてけ!!」

「く!!」

今は山賊に構っている暇など無い。だが山賊のほうは逃がそうとしない。

「ほゞよく見たら上玉じゃねえか・・・こいつはいいなあ」

「やめて！近づかないで!!」

そう叫ぶオリヴィエは痛む足で走った。

「逃がすかよ!!」

山賊たちはオリヴィエの足に石を当てオリヴィエを転ばした。

「うーぐ!!」

蹲るオリヴィエにじわじわと近寄る山賊。

「逃げられねえよ……んじゃ」

「く……う……」

恐怖で目を開けることの出来ないオリヴィエ。

そこに

「う……」

山賊の頭に石が投げつけられた。

「いて！うお……」

山賊が驚いた隙に黒い影が現われ山賊からオリヴィエを掴み取りオリヴィエを気絶させた。

「誰だ……」

たいまつで影を照らすと……

「……」

そこにはヒビキの姿が……

「やる……やっちまえ……」

山賊たちがヒビキに襲い掛かるとヒビキは山賊を蹴り飛ばしたいまつを叩き割った。

「なに！うわああああ」

山賊の長を柔術で投げ飛ばすヒビキ。地面に叩きつけられ気を失ってしまった長を山賊達は回収して立ち去ってしまった。

「すう〜・・・すう〜・・・」

ヒビキの腕の中で眠っているオリヴィエ。相当疲れていたらしい。

「」

ヒビキが口笛を吹くと駆けつける馬。

そのままオリヴィエを抱えたまま馬に跨ると何処かに向かうヒビキ。

「ん？」

夜明けと同時に目を覚ましたオリヴィエは自分の無事を感じ取ると辺りを見回した。

「じじは・・・」

オリヴィエが居たのはかつての自分の家・聖王の城だった。

十七之巻 集結する鬼達（後書き）

オリヴィエ

「ここに・・・剛烈剣が・・・」

ユラメキ

「さあ！鬼はつれてきたわ！！だから・・・」

ヒビキ

「聞かせてください・・・ユラメキさん」

ユラメキ

「ヒビキさん・・・覚悟」

十八之巻 裏切りの鬼

十八之巻 裏切りの鬼（前書き）

私！高町ヴィヴィオは！

クラナガンに住む小学四年生！！

ヒビキさんって言う鬼に変わって人助けする人に出逢ってから・・・

何かが変わり始めました。

剛烈剣を求めてオリヴィエが聖王の城に着くと同時に色々な真実が分かるのでした！

鬼・ヒビキ

夢・高町ヴィヴィオ

長・日高仁志

優・高町なのは

和・持田ひとみ

十八之巻 裏切りの鬼

十八之巻 裏切りの鬼

現代

喉が渴いたので飲み物を取りに来たヴィヴィオはなのはが電話している姿を目撃した。

「ユーノ君。家ちゃんと片付けてる？」

どうも家の事が心配なようで留守番しているユーノに電話をかけたようだ。

『失礼だな〜ちゃんと片付けてるよお・・・』

「それ嘘だったらあの時の『パンツまるかぶり事件』の事皆に言っちゃうからね〜」

『な!なのは!?!それだけは絶対に止めて!!』

「いやあ〜あんなに喜んでじゃうなんて流石の私もドン引きしちゃったな〜」

『て!あれはなのはが勝手にやったんでしょうが!!被害者は僕!』

清廉潔白を主張するユーノ。

「・・・パパ・ママいちゃつくなら帰ってやってよぉ・・・」

そんな電波を放っておき本の続きを読むヴィヴィオ。

聖王の城の宝物庫を調べるオリヴィエ。

「何処かにあるはず・・・剛烈剣の手がかりが・・・」

宝物庫内をくまなく探すが捗らない。

「ん？」

財宝という財宝は既に略奪されていた為物置のような姿になっていると空腹になり光さんに持たされていた弁当を開いた。

「よつと・・・」

何処か手頃な置物に腰掛弁当を食べ始めた。

「がつがつ」

余程お腹が空いていたのかがつついて食べると・・・

「痛!」

気を緩めたせいか突然指先が痛み始めた。見てみると血が出ている。何処かで引っ掛けたのだろうと手ぬぐいを巻こうとしたその時だった。

「なに？」

オリヴィエの落ちた血を受けた置物が唸りを上げ始め沈み始めた。

「これって・・・まさか」

置物の下から階段が現れていた。

置物に聖王家の者の血が触れた瞬間移動する仕掛けだったようだ。恐る恐る階段を下るオリヴィエは持ってきた着火装置でたいまつに火をつけた。

あたりを散策しながら広い空間を移動するオリヴィエ。

「・・・・・・・・!!あれは!」

冷たく薄暗い空間の中に一本の日本刀が・・・

「これが・・・剛烈剣？」

日本刀を手にしたオリヴィエは空間から出るとあることに気づいた。

「!・・・・・・・・これって・・・」

薄暗い空間では読むことが出来なかったが日が差す宝物庫で読めてしまった文字。

鞘に書かれていた『響鬼』の名前。

それも響鬼の世界の言葉で・・・

「何で・・・何で響鬼の名前が」

「・・・見つけたみたいだね」

「!?!」

背後から声がした瞬間振り返るとそこにはオリヴィエがもつとも憎む鬼・ヒビキの姿が・・・

「どうして?・・・まさか!お前が私をここに連れてきたの!?!」

「剛烈剣は見つけたみたいだ・・・僕がやるのはここまでだ・・・」

ヒビキがそう言って去ろうとした瞬間へたり込むオリヴィエ。

その様子を見たヒビキは・・・

「街まで送ります・・・本当にこれが最後です・・・」

オリヴィエを担ぎながら馬を呼ぶと王都に向かうのであった。

王都

鬼を集めたユラメキが九尾の狐に挑もうと前回の決戦地である海沿いの峠に向かっていた。

「ユラメキさん・・・本当に勝つ気ですか？」

「・・・・・・・・」

イブキの言葉を聞こうとしないユラメキ。

「正面突破しようとしても前回の二の舞になるだけです・・・せめて作戦を立てないと・・・」

イブキの言葉を聞き流しながら足を止めたユラメキ。

「・・・・・・・・」

「え？」

イブキが何かに気付くと・・・

「うわー!」

突如魔化魍に襲撃されるデンキ。

「デンキ君!?!は!?!」

咄嗟に下から罾が張り巡らせられイブキが避けると・・・

「!?!」

小型の魔化魍の群れが奇襲を仕掛けてきた。まんまと誘い込まれてしまった。

「何だこれ!?!」

「ぐ!?!」

タツキ・ヒナキが捕獲され動きを封じられてしまう。

「これは・・・ぐう!?!」

「ガンキさん!?!」

九尾の狐の尻尾に弾き飛ばされるガンキ。

「く!?!でえい!?!」

烈雷を振り回し攻撃を防ぐトドロキと避けるイブキ。

「・・・イブキさん・・・トドロキさん・・・あなた達の翔烈弓と激烈槍・・・渡してください」

イブキとトドロキに武器を渡すように要求するユラメキ。

「何故です・・・ユラメキさん!!」

トドロキの叫びに顔を背けるユラメキ。すると背後から現われたのは朱天童子だった。

「わからぬか・・・こいつは俺たちの側に付いたのだ・・・」

「そんな・・・そんな事って・・・」

トドロキが繊維を喪失しかけたその時だった。

『クエエエエ!!』

突如鷹が舞い上がり鬼達を捕獲していた罟を破壊した。

「!?!」

ユラメキが視線を送るとそこにはヒビキとオリヴィエの姿が・・・

「ユラメキさん・・・どうして?」

動揺を隠せないオリヴィエ。王都に到着した途端ユラメキが鬼を率いて討伐に向かったと聞き直ぐに後を追ったのだ。

「・・・聞かせてください・・・ユラメキさん・・・」

馬から下りてオリヴィエの盾になるように立ちながらユラメキに問

いかけるヒビキ。

「もう！嫌になったんですよ！！人間のために戦うのが「嘘だ」え？」

「ユラメキさんはそんな人じゃない・・・言ってください本当の事を・・・」

ヒビキの問いかけに苦虫を嚙んだような顔をするユラメキは開き直った。

「嘘をついてるのはどっち？ヒビキ君」

「・・・」

「どう言う事？」

ユラメキの言葉に言葉を濁すヒビキに疑問を持つオリヴィエ。

「・・・その子にまだ教えてなかったんですね・・・本当のことを・・・ヒビキ君の事だから秘密は墓まで持っていくつもりだったんだろっけど・・・あの聖王が死んだ時の事」

「・・・何？・・・どう言う事！？」

オリヴィエの言葉にユラメキは答えた。

「あなたの恐怖が記憶を作り変えたみたいけど・・・教えてあげるわ・・・本当の事・・・」

ユラメキが真実を話し始めた。

先代聖王の時代。

ヒビキは東洋医術の権威として聖王家御用達の医者となっていた。

聖王も奥方も東洋人であるヒビキによくしてくれ、オリヴィエも懐いていた。

だがそれは突然の事だった。

ある時覇王家の襲撃と魔化魍が同時に起こってしまったのだ。

ヒビキは鬼となり魔化魍と戦ったが力及ばず聖王と奥方を守りきれずに魔化魍を倒した。

そして魔化魍を倒した後のヒビキを目撃してしまったオリヴィエ。

幼子の目にはヒビキが聖王を殺した姿にしか見えなかったのだろう。

この事は鬼の間しばらくの間噂となっていた。

「これが真実……意外にあっさりしてるでしょ……」

「嘘……じゃあ……ヒビキは……父と母を……」

「ただ守りきれなかっただけ……」

「!?!」

目を閉じるヒビキとその場へたり込んでしまつオリヴィエ。今までの恨みの全てを覆されてしまったからだ。

「どうして……何で……私は何の為に……」

「おしゃべりは過ぎたわね……!?!」

戦意喪失したオリヴィエに向かってユラメキは泡沫で打ちつけようとした時ヒビキがオリヴィエの前に立ちはだかり泡沫を絡めとり回避した。

「この子は傷つけさせません……」

「律儀に聖王との約束を守ってるんだ……ヒビキ君らしいな……!?!」

「うわああああ!?!」

ヒビキを無視しオリヴィエを崖から投げ落とすユラメキ。それを見たヒビキに言葉が思い出された。

(聖王! 聖王!?!)

(ヒビキ……オリ……ヴィエ……頼む……ぐ!?!)

「!?!」

落とされたオリヴィエの下に駆けつけ抱きとめるとそのまま海に落下したヒビキ。

イブキ達も隙を見て全員撤退した。

その姿を見たユラメキは朱天童子に振り返った。

「さあ・・・約束どおり鬼が戦う気を無くさせた・・・だから海女の皆の命を・・・」

「・・・あれでか」

「・・・仲間の鬼に裏切られたんだもの・・・もう一緒に戦う人や戦ってやるうとする鬼は居なくなります・・・さあ！！私の所の海女の人達を解放して！！」

そう言うユラメキ。

「まだだ・・・確実に鬼が消えるまではな・・・」

「・・・く！！」

朱天童子に向かって憎しみを込めた目で睨むユラメキ。

「は！！はあ！！」

オリヴィエを抱えながら浜に上がるヒビキと起き上がったオリヴィエは……

「離して!」

「少女さん?」

「あんなんに助けられたくないわよ!」

無我夢中で憎しみをヒビキにぶつけるオリヴィエ。真実がわかっても割り切ることが出来ないのだ。

「……」

その姿を黙って見送るしかないヒビキ。

十八之巻 裏切りの鬼（後書き）

オリヴェエ

「私は一体どうすれば良いの・・・」

イブキ

「このまま私達が留まれば憎しみが生まれるだけです」

ヒビキ

「聖王・・・すみません今の僕のカじゃ・・・」

光さん

「これが・・・聖王の気持ちなんじゃないかな？」

オリヴェエ

「だから・・・だから戦ってください！！ヒビキさん！！」

十九之巻 武装する鬼

十九之巻 武装する鬼（前書き）

私！高町ヴィヴィオは！クラナガンに住む小学四年生！

ヒビキさんって言う・・・鬼に変わって人助けする人に出逢って・・・

何かが変わってきました！！

等々真実が分かってしまったオリヴィエに追い討ちをかけるような
霸王の追放・・・

そして

オリヴィエがとった行動は・・・

鬼・ヒビキ

夢・高町ヴィヴィオ

長・日高仁志

優・高町なのは

和・持田ひとみ

十九之卷 武装する鬼

十九之巻 武装する鬼

霸王家

「もはや！鬼も！オリヴィエも信用できない！！我等の身は我等で守るのだ！！」

剛烈剣が見つかったとはいえ持っているのはオリヴィエ。

そのオリヴィエの連れて来た鬼達は全員が裏切った。

オリヴィエの信頼を全て捨て自己による解決を導き出した。

クラウドを餌に九尾の狐を一網打尽にするべく戦の準備に掛かる霸王家。

一方岬では……

「まさか……ユラメキさんが……」

ユラメキの裏切りを信じられない鬼達。自分達を引っ張ってきたの

はユラメキであり要を失ってしまったのだ。

その要は裏切ってしまったのだから簡単に割り切れないのだ。

「……そろそろ……子ども達の顔が見たくなつた」

「ガンキさん!!」

脱退を宣言するガンキ。

それに釣られるように……

「私も……行きます……」

「イブキさん？」

「ここに居ても……皆さんの憎しみを増すだけです……」

「そうね……ちよつと距離を置いてみるのも良いかもね……」

「だな……元々面倒だったし……」

「な! ヒナキさん! タツキさんまで!!」

イブキの言葉を肯定するヒナキとタツキ。トドロキは必死に止めるが……

「師匠……止めましょう……」

「デンキ……何言ってるんだ!？」

「目的を失いました・・・」

デンキも脱退宣言をすると鬼達は己の道を進み始めた。

残されたヒビキとトドロキは・・・

「トドロキさんはどうするんですか？」

「ヒビキ君・・・残念ですけど・・・二人だけじゃ勝てないっす・・・」

「二人つて・・・」

「それじゃあ・・・」

残念そうな顔のトドロキも去り一人残されるヒビキだった。

光さんの店

霸王家を追放されたオリヴィエは行く当ても無く光さんの店で一人で悩んでいた。

憎んでいたヒビキが実は恩人だった。

気持ちに整理がつかない。

「お茶・・・煎れ直そうか・・・」

そんなオリヴィエの気持ちを察したのか光さんはオリヴィエに温かいお茶を煎れた。

「・・・光さん」

「ん？」

「私・・・分からなくなっちゃったんです・・・何の為の旅だったのか・・・」

己の全てを否定されただけの旅に光さんは・・・

「オリヴィエちゃん・・・目に見えるだけが全てじゃないよ」

「目に見えるだけが？」

「・・・ちよつと見せてくれるかな？」

剛烈剣を見る光さんは考え込むとやがて優しい笑みを零しオリヴィエに言った。

「・・・オリヴィエちゃん・・・これが・・・聖王の気持ちなんじゃないかな・・・」

「え？」

剛烈剣に書いてある響鬼の名前。この世に斬れぬもの無しといわれた聖王家の宝刀に刻まれた聖王家以外の者の名前・・・

「響鬼君なら・・・正しく使ってくれる・・・そう思ったんじゃないかな?・・・自分が一步先に進む為の真実の旅が見せてくれたのは・・・」

「・・・光さん・・・私は・・・私は!」

剛烈剣を握り締めるオリヴィエは立ち上がりある場所へ向かった。

覇王家の兵士達が九尾の狐に向かって出陣する姿を崖の上から見るヒビキ。

「・・・ごめんなさい・・・僕のカじゃ」

馬に跨りながら黙って見る事しかできないヒビキは自分の無力さを嘆いた。

だが状況が変わるわけではない・・・

ヒビキが逃げようとしたその時・・・

「!」

ヒビキの前に剛烈剣を持ったオリヴィエの姿が・・・

「・・・少女さん・・・」

「……くっ……!!!!」

剛烈剣を抜きヒビキに向かって構えるオリヴィエとオリヴィエになら斬られていいと思ってしまうヒビキ。

オリヴィエが間近まで迫った瞬間剛烈剣をヒビキに差し出した。

「……少女さん？」

「……戦ってください……」

「え？」

オリヴィエの言葉に驚くヒビキ。

「戦って……ください……」

ヒビキに剛烈剣を差し出した瞬間。ヒビキも剛烈剣に己の名前が刻まれてることに気付いた。

「これは……」

「戦ってください……これが……父の気持ちなんです」

涙をこらえながら呟くオリヴィエ。

そしてヒビキも剛烈剣の中から訴えかける魂を感じ取った。

「……だから……だから!!戦ってください!!ヒビキさん！」

「！」

涙を流したオリヴィエの言葉にヒビキは……

「！！！」

オリヴィエの持ってきた剛烈剣を掲げた。

「クラウド公を守れ！！！」

霸王家の兵士達が魔化魍相手にクラウドを庇いながら戦っているが歯が立たない。

「みんな……」

自分の無力を思い知らされるクラウド。

その時だった！！

「クラウドス！！！」

「！！！」

ヒビキと共に馬に跨り魔化魍を駆け抜けるオリヴィエの姿が……

ヒビキが変身音叉・音角を構えた瞬間……

「!?!」

・・・キーン・・・

静かな響きと共にヒビキが音角を額に掲げた。

ヒビキの体が紫の炎に包まれ・・・

「ああああああ・・・ああああああ!?!」

鬼の姿に変わった!!

響

鬼

響鬼

響鬼はオリヴェイエを抱え馬から飛び上がるとクラウドスの元に舞い降りた。

「!?!」

響鬼に気付いた狐の魔化魍たちは一斉に響鬼に襲い掛かると音撃棒を構える響鬼。

「はあ！！せあ！！といやああ！！！！」

一体一体丁寧に撃破していくとクラウドまでの活路が開かれオリヴィエと共に駆けつけた。

「オリヴィエ！」

「クラウドス！もう大丈夫！！」

「けど！！」

多勢に無勢なことは分かりきっているクラウドに・・・

「きりが無い・・・はあああ・・・」

音撃棒を構え法力を込めると烈火弾を放ち狐を一掃し脱出路を開くとオリヴィエたちを先導する響鬼。

「こつちだ！！」

魔化魍の群れを抜けたその時だった。

「・・・響鬼君・・・」

「揺夢鬼さん！！」

響鬼の目の前に立ちはだかる揺夢鬼と朱天童子。

「若造・・・一人だけか・・・」

朱天童子の明らかな挑発・・・

だが響鬼は・・・

「僕は・・・一人じゃない・・・」

「響鬼さん!!」

オリヴィエから剛烈剣を受け取り抜刀する響鬼。

「響鬼!武装!!」

響鬼の叫びと共に鞘が紫に燃え上がり響鬼の身体に纏わり着いた。

紫の炎が鎧となった瞬間・・・

「はあああああああ!!」

剛烈剣の一閃と共に炎を吹き飛ばした響鬼。

紫の鎧武者のような姿

超重量剣を思わせる剛刀・・・

武装響鬼は・・・

「行くよ!!」

剛刀・剛烈剣を構えた。

十九之巻 武装する鬼（後書き）

武装響鬼

「これが・・・剛烈剣の力・・・」

揺夢鬼

「私は・・・」

武装響鬼

「自分に嘘をつかないで!!」

朱天童子

「このゴミどもが」

武装響鬼

「僕はお前を・・・倒す!!」

二十之巻 決着の過去

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3596u/>

リリカルなのは 戦鬼の男

2012年1月13日21時41分発行